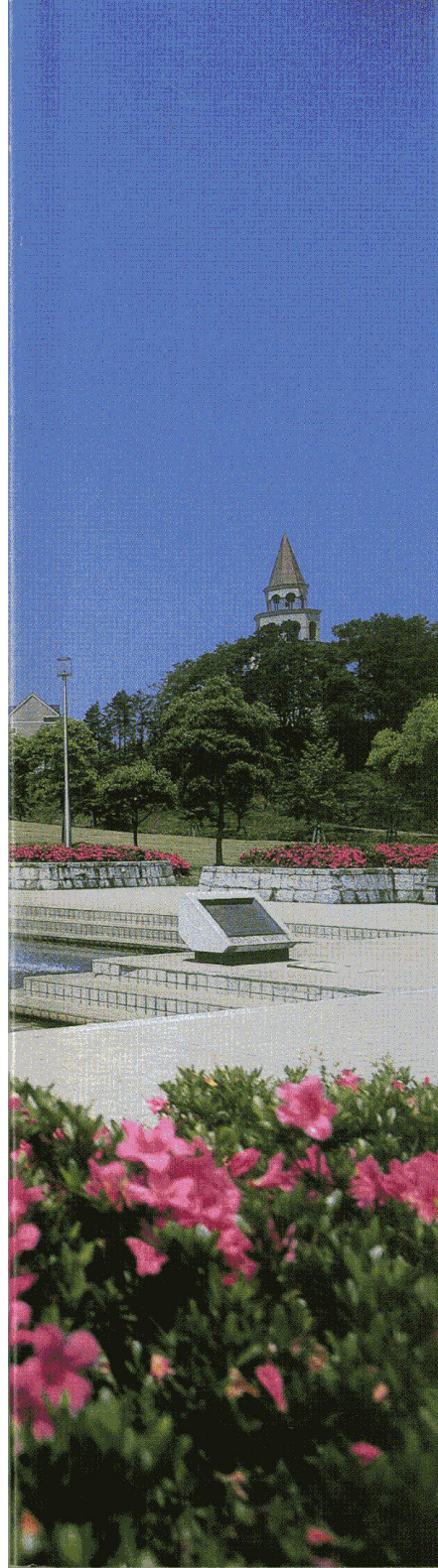


作東の文化

発刊30周年記念号 No. 30



作東町文化協会



作東の文化

No. 30



写真 安田 隆

平成16年10月15日

作東の文化

No. 30



表紙写真
バレンタインパーク作東

目次

巻頭言

「作東の文化」三十号記念誌発刊にあたって 圓東順一 1

特別寄稿

作東町文化協会発足とその様子 阿部雲魚 3

義太夫とわたし 岡田千茶 4

雑感 梅雨空にも似て 春名宏 6

三十周年記念特別寄稿 里見靖子 8

書に思う 安東靖章 9

日本画と私 山本 10

「作東の文化」発刊三十年記念誌によせて 10

作東町文化協会沿革史 10

所感寸言 井上健和 22

作東町立図書館を利用して 井上健和 23

曆 井上健和 24

楽しみ 井上健和 26

随筆随想 稲井 26

妻百句 原江 28

随想 原江 30

ケン栽培 長家 31

我が家のIT革命 中藤 33

希望をもって生きる 加藤 35

米のなる木の唄の思い出 春名 37

那岐山の陰 衣笠 38

小さな旅の思い出 小笠 39

歴史紀行

東備前・美作を通られた後鳥羽上皇の隠岐配流の道筋 加藤芳英 42

川崎村の江戸時代 野村勝志 44

老いのたわごと 吉政実夫 47

第二次世界大戦争に戦って 長家博志 49

短文芸

俳句 但馬竹田城 坂田部 52

山の家 坂田部 53

菊日和 春名 54

雛流し 春名 54

やせ蛙 黒川 55

四ツ塚 江見 55

福達磨 青山 55

合歓の花 安山 55

大銀杏 本元 55

姫女苑 橋本 55

写経 野橋 56

眠ひて 野橋 56

沙羅 宿野 56

折おりに 杉野 57

山笑ふ 井本 57

孫新郎 加藤 57

夜明の風鈴 森久美 58

ノースヴェイレッジにて 原順子 58

春から夏へ 原順子 58

夏模様 遠藤綾子 58

〔巻頭言〕 「作東の文化」三十号記念誌発刊にあたって

会長 圓東 順一

作東町に、文化協会が誕生したのは昭和四十二年である。

文化の日を中心に、書・絵画・盆栽等で文化展覧会を開催していた。

その文化展は、年と共に出品者も増え、盛会になっていった。こうして何年かたった頃、先輩諸氏の中から文芸作品の発表の場を作ろうという声が上がリ、文化誌「作東の文化」が発刊された。

原稿集めから、編集・発刊と苦勞されていた。なかでも、経済面の苦勞はなみたいていではなかった。

町当局からの援助は無く、会費制でもなく、有志の方の寄附、文化誌に広告の掲載と、苦勞の連続であった。

こうした苦勞を乗り切った今日の三十号である。

文化協会に対しての理解も深まり、会員制も定着し、年を重ねるごとに盛会になってきた。

文化誌についても、町当局からの委託金の交付を受け、編集委員の努力により、軌道に乗せることができた。また、毎回、町出身で文化活動で活躍されている先輩各氏に、特別に原稿を依頼し、質の高い文化誌を心がけてきた。

この記念誌三十号には、協会発展のために、ご尽力いただいた先輩諸氏、長年編集を手がけていただいた委員、それに加えて、町外で文化活動で活躍されている諸先輩の方々に、特別に原稿をお願いし、協会の歩み、文化の高揚にと貴重なご意見、ご指導をいただいた。感謝申し上げます。さらに積極的な投稿をして下さった会員の皆様、発行を待ちわびて下さっている方々に感謝申し上げます。

昨今は、町村合併という話が持ち上がり行政も大きく揺れ動いている。文化協会もその波に乘らざるを得ない時期にさしかかっている。文化は、止めることは出来ない。お互いに知恵を出して協会を盛り上げ、文化を発展させなければならない。「作東の文化」記念誌三十号を節目として、より質の高い「文化誌」を目ざして進むべく努力したい。会員皆様の一層のご協力を切望する。

特別寄稿

作東町文化協会発足とその様子

阿部 雲 魚
(岡山市 書家)

文化協会を作ったのは昭和四十二年五月二十七日、設立準備会を開きこの方面に関心のある人々に呼びかけて声を上げた。私は長い年月、日本の各地で生活した為に、田舎に帰ったら農村文化に少しでも力を入れたいと思っていた。その導火線になったのは、東北の詩人宮沢賢治氏に会い（花巻農学校）、農村を文化的に止揚したいと熱心に何度も話されたその印象が心に響いたことである。外にも茨城県在住時代横瀬夜雨・小川芋銭等の文化人との交流は見聞を広めた。その後、上京研学を望み、河田杰博士の紹介で農林省山林局林政課に在勤したが、幸運な事に日本博物学会の人々故牧野富太郎博士・河田杰博士・寺崎渡博士・内田清之助博士外碩学の集まりの中に住み、各博士の温情と研学と便宜を図られた事について感謝の念は今も忘れない。その外学生修道院に在勤しクリスト心宗開祖川合信水師の直接指教を得た事は父子共

に影響を受け生涯の精神の支えとなり、今も続いている。有り難い極みである。日曜礼拝には日本の知識人や宮家政治家等毎回四十人程度の集会であり、各種各様の日本を代表する人達の学識と経験は広く見、深く悟り、人間の道を自然に教示され、後年生涯どれ程益した事か分からない。青年期のこのような暮らしの後帰郷して見る農村の現況を知る時、生活文化を向上進展させて共に働き共に進み、相互に睦み合い、礼を以てする各種芸道を入れ、趣味の高尚を求め、広く深く常に微笑をたたえた生活を希った。時を得て人々に話し、殊に帰郷中の故山田桃源氏の美味にふれ毎日のように出入りした事は、風流韻事も少し理解し、礼をもって理を正し、会の仕事に乗せようと念じたが、最初五十三人の人が集まり、会費三百円でどうして会の運営が出来るかと心配し、当時の町長神原氏に補助を願った。ぼつぼつ毎年の文化展や講演会程度で

会を存続するのに苦心した。その間民間の多少の援助を得て兎に角存続させ、時の到来を待った。時代的にも会費が要るのかと大方の人には入会して頂けなかった。理解度の低い状態で私の力不足を知った。文化展だけは続き、趣味的なもので小中学校生徒の作品が多かった。各部を創り、一般の出品も十四、五点から二十点位はあり、年一度の文化展でぼつぼつと足を運んでくださった。兎に角、続けることが一番と、どんなに会費に苦しんでも止めない覚悟だった。

文化誌発刊は創会時よりの念願であったが八年目から漸く第一号が昭和五十年に刊行。岩本泉水、故高田青園二氏には殊更迷惑をかけた。全員手当を一文もせずによくやって続けてくださったものである。何事でも発足当

時は困難で、平坦な道では無かった。後に次々と会員に新人を加え、新方法と時代の人々の理解は絶大なもので、最初の目途の農村文化と諸氏の愛郷心、経済的向上その他農村にも豊かさが見え、大変な盛況の現在を想い、物心共に願った農村文化の根が張り、幹を太らせ美しい花を咲かせる日も近い。その繁榮の影に会長以下役員諸氏の献身的努力、一般住民の理解と時代の変化により楽園の美しく太々しい結実を望み、感謝と希望の念に耐えない。今文化の花咲く輝く古里の町、嬉しい限りである。粗文を列挙すれば私事の羅列になり、当時の事物は私事に繋がれると思うと自己吹聴になり恐縮し低頭し感謝の一念である。

平成十六年七月二十五日朝記

義太夫とわたし

岡田 千 茶
(朝日新聞岡山柳壇選者)

半世紀前になりますが、義太夫の稽古をしたことがあります。当時、岡山東警察署で交番勤務をしていました。初夏の宵の口、受け持ち管内を警らしてましたら、ある家から太棹の三味線の音色が聞こえてきました。作東地方では、戦前から地下芝居と言って素人歌舞伎が盛ん

で、子供の頃から演じられる度に見ていましたから、義太夫の三味線とすぐ分かりました。

気になるので或る日その家を訪ねました。本宅の脇を入って行った離れが三味線の主の住まいで、素人に義太夫の稽古をしているのでした。芸名が鶴沢八州という年

配の女性で、後で知ったのですが、稽古に通ってくるお弟子さんの一人、表町の商家の主人のお妾さんでした。岡山にはも一人同業のお師匠さんがいて、年に何回か広い会場を借りて合同で素人義太夫大会が開かれていました。その後非番の夜八州さんを訪ねて、座敷の隅でお弟子さんに稽古をつけられるのを神妙に聞いていました。何回かそういう事が続くうち「稽古をしないのなら来ないで」と言われ、やむなく稽古をすることになりました。今考えると私は三十歳になったばかり、警察官の安月給、義太夫の稽古をする金銭的余裕など全くないのに、よくぞ家内が許してくれたものだと思います。

義太夫を稽古された方はご存じの通り、畳半畳を隔てて見台（稽古本を置く）を前にして師匠と差し向かいに、差し下駄のような形の尻当てを尻の下に敷いて正座します。一礼して見台の上の勘亭流で書かれた稽古本を押し戴き、おもむろに開くと三味線の演奏が始まり、稽古に入ります。初日から二、三回は師匠の弾き語りを黙って聞くだけで、四日五日と経って初めて「声を出してみなさい」と言われる。師匠が一節を語った後、ほとんど口真似でその一節を語り、二、三回それを繰り返す。次回は稽古した一節を語って聞いてもらう。後、次の一節を師匠が語るのを聞く。これの繰り返しで素人義太夫大会で語る二十分程の語りを仕上げるのです。

私が初めて稽古したのは、『御所桜三段目ノ切』通称『弁慶上使ノ段』の女房おわさの口説きのある処。義太夫で「口説き」「さわり」というのは曲の中心となり、最もしんみりと聞かせる部分のこと。曲の中の聞き処、聞かせ処とされている箇所、三味線の音色と調子がよく、語っていて楽しく、聞いて気持ちの良い処です。

私を含め義太夫を稽古するくらいの者は、さわりの一つや二つは稽古しなくても語れるくらい聞き覚えていて、耳が覚えているものだから、調子の良い三味線に乗って語っていると、師匠が突然三味線をジャラジャラと鳴らして演奏を止め、苛立って大声を出す。「駄目だめ、駄目ッ！三味線についていちゃあ」と言う。三味線に付かず離れず語るのが正常な語り方だとされているのです。三味線の音色に乗って語るとべたべたした感じになる。語るほんの一瞬後を三味線が追っかけるくらいが格調高く聞こえるのです。三味線の音色が耳に入り、つい三味線につられてしまふ。私は何度ジャラジャラをやられたことか。

師匠はまた「下腹に力を入れて声は腹から出す、口先で語っては駄目。」と口やかましく言っていました。

岡山市中山下にあった岡山美術倶楽部の楼上で開催された素人義太夫大会に、私が師匠の三味線で『絵本太功記 尼崎乃段』を語ったのは一年後のことだ。

雑感 梅雨空にも似て

春名 宏

(作東町長)

しとしとと、寂しげに悲しげに降る雨を、嬉しく楽しめいかのように艶やかに、薄紫やピンクの色を一段と引き立たせ咲きはこる紫陽花の花が美しい昨今。台風六号は幸いにもこの地方に災害をもたらさず事なく過ぎ去った。以前の台風による災害発生の余韻が未だ消え去らない思いが脳裡をかすめ、又しても災害かとの思いが巡った。折しも、六月定例議会の真っ只中であつた。議会での議員皆様の一般質問は熱をおびてきていた。議員各位は地域を思い、町民の幸せを！町政の発展をの熱意がひしひしと伝わって来る。私も又、皆さんの思いにお応えしなければと執行部が一生懸命努力して取り組んでいる姿勢をお示しし、究極の目的は町民の幸せの追求であるという願望を理解してもらふ事にあつた。今回も町村合併について多くの議員さんから質問をいただいた。

顧みると、町村合併議論等七、八年前まではほとんど話題になる事は無かつたように思う。平成十三年一月に、岡山県市町村合併検討委員会から県下七十八市町村を十九市町村に合併するという答申が示された。以後県下各地で合併議論が沸騰する事になって来た。勝英地域に

おいても平成十四年六月に英田郡町村会と議長会が町村合併の取り組みを協議し、七月には勝英二郡町村合併問題研究会を設立して合併に向けてスタートを切る事になった。

更に、十月には久米郡の柵原町を加えた研究会にと発展して、本格的研究が進んで行った。しかし、住民投票によって単独町政を維持するとした町や、平成十五年三月には新庁舎の位置や新町名等によって他町村の合併に対する考え方に隔たりがあるとして、研究会を脱退する町が出て、研究会を解散する事となって来た。

一方、国や県においては自主的合併とは言いながら、日毎に合併に向けた世論の形成が進められていった。

平成十五年五月には英田郡内町村において合併を研究しようという事になり、わが作東町に事務局を設けて英田郡を単位とする研究が進んで行く事となった。何回となく会議が持たれ、各町村間の課題や調整へと協議が進んでいた矢先に、今度は美作町が、英田郡の範囲は余りにも地域が広範囲であるので小さい範囲での合併を検討するという事で、又しても研究会より脱退される事となっ

た。この広範囲とは名ばかりで、実は作東町や他町の財政問題がネックとなつての脱退であつたと言われている。そうこうしている間に、勝央町や美作町を中心とした合併の枠組みが形成され、合併協議会として進展していく事となり、作東以北はとり残される事となった。先方へ協議しても合併までに時間が無いと協議も袖にされる始末であつた。

平成十五年十一月、美作町長選挙が告示され、選挙公約で合併は先ず英田郡が一つになつてと言ふ候補者が現れ、合併のあり方を問う選挙戦と言つてもいい争いが展開された。その結果、「英田郡を一つに」の訴えが町民の大多数の支持を受けた候補者が当選になつた。

その後、当局者の日夜を分かたぬ大変なご苦労によつて、勝央町・美作町中心の枠組みは崩壊し、再度英田郡での（英田町を除く）合併任意協議会を設立する事が出来た。その後、勝田町が加わつて勝英地域合併協議会へと進み、平成十六年三月三十一日、岡山県知事より合併重点支援地域としての指定を受ける事が出来た。

その後、それぞれの町村では議会の皆さんと真剣な討議や協議が続いている。近隣でも飛び地での合併に向けた協議が進められていたが、岡山県知事の「一体的なまちづくりや効率的な行政運営などの面で課題が想定される」として飛び地合併は拒否される事となつた。その後、

英田町から勝英地域合併協議会に加入の申し込みがあり、協議会では受け入れを受諾した。更には構成町村議会でも加入が承認され、英田圏域の枠組みで合併協議が本格的協議へと進んでいる。しかし、協議の中でいつも話題になるのは作東町の財務問題であり、悪者になつたかのよな発言がある。私たちは、作東町に誇りと自信を持ち、優れた町政を誇らしくさえ思うもの他町村の目は厳しい今日である。

先日、全国の町村長に麻生総務大臣より手紙が届いた。本当に町村の窮状を察知しての手紙であろうかとは思いつつ、是非町村の苦悩を分かかつてほしいと願わずにはおられない。

ふる里は守らなければならない。それが今生きる者の役目である。ふる里のない人生は寂しく、ふる里があるからこそ世代間のつながりが保たれているとある人は言っている。

今日からも、なお合併議論に苦悩する日々は続くと思ふ。

梅雨空を恨めしく思いながら空を見上げる。その視線の向こうに咲き誇る紫陽花が美しく心を癒してくれる。

早くすっきりとした夏空になって、爽やかな心地良い汗が流せる日を期待する今日である。

三十周年記念特別寄稿

書に思う

里見 明

(特別顧問)

昨秋、伊香保で全国里見一族交流大会があつたその帰途、鬼怒川温泉グランドホテルに一泊したときのこと、廊下の片隅にかけられた額にふと目をとめた。見事なまでの達筆で、それでいて誰にでも読めるような親しみのもてる書体で書かれていた。

一、人に接する時は温かい春の心で。
一、仕事をすると燃えるような夏の心で。
一、考える時は涼しい秋の心で。
一、自分に向かう時はきびしい冬の心で。

とあり末行に「四季の心で」と結んであつた。残念なことに不勉強な私には出典も作者も今もってわからない。

若いころ読んだ本の中に、「春風以接人、秋霜以持己」ということばがあり、引用させてもらっている。

「四季の心で」と内容的には同じである。私は「風」の中ではなぜか春風が好きである。ことばからも、心癒されるものがある。「温かい」がつくとなおさらである。

仏教詩人であり、書家でもある相田みつをさんの書は

見ていて楽しくなる。難問はトイレで考えよと昔から言われているが、先生の「ひとりしずか」や、「おかげさんで」のトイレ専用のカレンダーがある。毎日めぐりながら、時にはハッとさせられることや、ほっとすることばがある。相田みつを美術館に一步足を踏み入れると、銀座にあつて、ゆったりと静かな感動と落ち着きをとりもどせる。都会のオアシスと言われるのもうなずける。

堅苦しい文章や、読みづらい書体の手紙や葉書は心の通わない場合が多いようである。文化とは大衆と結び付きやすい、誰でもが親しみのもてるものでありたいと思ふ。日常生活の中にこそほんとうの文化が育まれるものである。

作東町文化作東の文化誌発刊三十周年にあたり心よりお祝い申しあげるとともに、関係皆様のご労苦に深く感謝の意を表し、ますますのご発展を祈つてやみません。

日本画と私

安東靖子

虹の会（日本画）の展覧会が、九月にアルネであります。一人八点の目標なので、暑い夏、汗をふきながら、二十号のアリストメリアがやっと完成し、三十号の芍薬に取り組んでいます。日本画を習い始めて三十年近くになります。何年たってもなかなか思い通りの絵が出来ません。

昭和五十年頃、私は、二人の子供が成長して大学へ入学して少し時間の余裕が出来た頃、ふとしたことから好きだった絵を描いてみたいと思うようになりました。津山市教育委員会で、日本画を教えられる松山先生の教室に入り、月二回津山文化センターに通いだしたのが最初でした。昼は農作業で忙しくて、夜になってよく描いたものです。

その後、教えていただいた先生も替わられましたので、現在は津山の神尾先生の教室で、月二回金曜日に日本画を習っています。岡山県北展や、岡山県勤労者展にも出展出来るようになりました。時には暇をつくり、岡山まで展覧会や院展など見学しに行つて、日本画のすばらしさに感動したり、学んだりしています。

日本画はやさしく、美しく、今もあきることはありません。私は以前作東町の婦人会活動をしていた関係で、絵の好きな婦人会員さんにたのまれて一緒に絵を描いて楽しむ事になりました。毎年元氣よく咲く、さつきの名を取って「さつき会」としました。

それからは、作東町ふるさと祭りや、作東町新春展にも積極的に参加して、皆さんと共に喜びファイトをもらっています。

趣味の会は年齢に制限もなく、上手・下手の関係なく、その人の個性を大切に、自分で感動したものを自由に描く会です。アドバイスしたり、時にはほめたりしながら、お互いにはげまし合つて楽しい一時を過ごしています。又これからの人生を一層明るく楽しく過ごしたいものと願っています。健康には注意しながら、年と共に優しくなごやかに心がけながら。

「作東の文化」発刊三十年記念誌によせて 山本章

十年一昔といわれるが、三十年間絶えることなく発行が続いている「文化誌」は県内でも珍しいのではなからうか。

曾て十一号から二十六号までの十六年間に互り、編集に当たった者として感慨一入のものがある。

当時の思い出をたどれば昭和五十九年秋、創刊以来文芸部長として一手引き受けの形で編集に当たっておられた高田三爾氏が急逝されたため、その後を受け編集に当たることになった。

しかし、私も他に仕事をもっており、一手引き受けはできないので、十一号からは文化協会役員が協力して編集、校正を行うことにした。当時の投稿者は限られており、なかなか原稿が集まらず、編集に当たって原稿集めに苦労した。年によっては編集委員自身が何点かを投稿するか、或いは特定の人に投稿を依頼してスペースを埋めたこともある。

尚文化誌が一部同好者だけのものではなく、町内老若男女みんなが気軽に投稿し、多くの人たちに読まれ愛されるためにはどうしたらよいか、いろいろな心を砕いたもの

である。その一環として町内小学校の版画作品を載せると共に、毎年作東町長をはじめ町出身の有識者に特別寄稿を依頼した。今は鬼籍に入られた方もあるが、

阿部雲魚氏（岡山市・初代会長）

山田桃源氏（東京都・篆刻家、立体書道創始者）

上野晴夫氏（神戸市・歌人）

横山正人氏（岡山市・全国公民館協議会長）

竹内勸一氏（大阪市・元岡山聾学校長）

石川 瞭氏（岡山市・勝英振興局長）

千藤幸蔵氏（東京都・三味線師匠千藤会主宰）

山田富美子氏（東京都・桃源氏夫人）

岡田千茶氏（岡山市・朝日新聞川柳選者）

佐々木建昭氏（東京都・筑波大学教授）

井口克巳氏（東京都・詩人）

以上の方々から多忙な中、たびたび玉稿をいただき、文化誌に花を添えることが出来たことを今更ながら感謝している。特に初代会長阿部雲魚氏からは毎号欠かさず投稿いただいた。

また発行の経費も乏しく、当時は町内各商店等よりの

作東町文化協会 沿革史

蝸牛のような

歩みであったかもしれない

それでも歩みつづけた30年

その軌跡がここにある…



昭和44年11月 文化展会場にて役員会

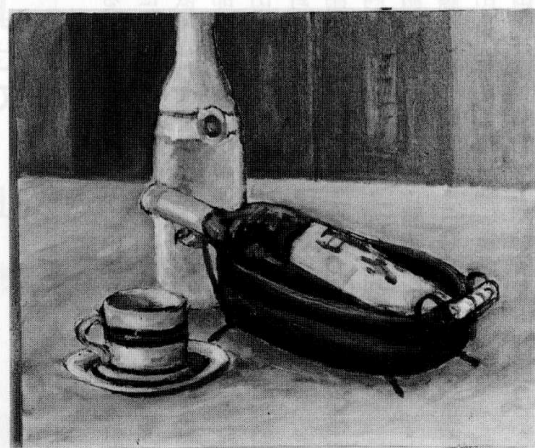
広告料や篤志寄付によって賄われていたが、毎年寄付を
お願いするのも困難なので、昭和六十一年に文化協会規
約を改正し、会員制として一口五〇〇円二口以上で会員
を募ったところ、多数の方々の賛同を得(初年度約三〇〇
名) 逐年会員が増加したため、発行経費については不安
がなくなった。従って十三号は町内全戸に配布し、誰で
も気軽に投稿でき、多くの人々に愛読されることを期待
した。

なお会則のとおり文化誌発行の他毎年各種文化展・書
画写真展・文化講座・講演会の開催並びに研修視察が行
われるようになり、昭和六十三年からは各学区に支部組
織が結成され、各支部活動も活発になった。

この頃から文化協会に対する町民の認識も深まり、会
員数も増加し、作東町からも文化誌の予算化をして頂い
た。

従って文化誌に毎号会員氏名を登録すると共に各部落
に評議員を置き会費の集金等をお願いした。

この頃から年一回発行の文化誌に会員の積極的な投稿
が増加し、原稿募集の苦労がなくなった。従来文化誌は
児童、生徒の作品を除き、表紙写真・題字・カット等す
べて会員の作品とし、編集、校正もすべて自前で行う
いわゆる手作りのものであり、現在では文化協会の機関誌
でもある。



洋画 末宗一之

町村合併が近づいているが、将来に互りこの伝統が生
かされ、益々発展することを心から切望するものである。

年月

事

柄

昭和41年11月
42年5月

広報『さくとう』に文化協会会員募集掲載（会の趣旨、活動方針等）文化協会設立準備会開催。準備会会長に、阿部正登を選任し、サークル活動を中心に会員相互の親睦と研修によって町の生活文化を高めようと文化協会の設立を決定する。

準備委員氏名 横山捷彦・沖田年雄・川端貞心

岩崎勝代・長家清子・高田三爾

衣笠武史・藤生昌宏・春名幸男

永谷 要・岩本文夫

部会名①書道部

②絵画部

③工芸部（彫刻、染色、編物、手工芸）

④園芸部（盆栽、盆石、花づくり）

⑤茶華道部

⑥碁将棋部

⑦文芸部（短歌、和歌、俳句、川柳等）

⑧音楽部（器楽、舞声楽、舞踊、朗吟等）

⑨写真部（視聴覚器材の利用も含む）

⑩歴史部（文化財その他）



阿部正登

作東町文化協会発足。会則を定め、年会費三〇〇円とする。

会長に、阿部正登を選任し、

副会長に、横山捷彦・岩本文夫を選任。

『作東町の歴史』発行。

9月

7月

42年11月

第一回作東町文化展覧会（二日～三日）

作東中学校屋内体操場に於いて開催。

出品数四八七点 参観者一、三〇〇人

第二回文化展覧会要項決定。『以後の文化展覧会開催の基本となる』

①趣旨 町内から作品を公募し、これを展示して広く町民に鑑賞の機会を提供するとともに、作品の向上をおして地方文化の進展に寄与することを目的とする。

②主催 作東町文化協会

③後援 作東町・作東町教育委員会

④期日 11月3日～11月4日

⑤時間 午前8時30分～午後5時まで

⑥作品 第1部 日本画及び洋画 第2部 書道

第3部 工芸（彫刻、手芸、染色、編物など）

第4部 盆栽、盆石、鉢花 第5部 俳句、短歌、川柳

第6部 写真 第7部 歴史に関する資料

第8部 生花、茶道 第9部 音楽、舞踊、朗吟、囲碁、将棋の実演

⑦出品 一部門につき三点以内

⑧出品料 一般三〇〇円、高校生・大学生五〇円、但し、会員は無料

第二回文化展覧会開催。（二日～四日）

『郷土の植物標本集』『今昔紙幣集』の特別出品を含め出品数三八〇点

文化協会と文化財保護委員会の提唱で『蛭を守る運動』が展開される。

『第一回町内歴史めぐり』福山・土居地区の神社めぐりを実施。

第三回文化展覧会開催。（二日～五日、予定を一日延長し、三日間開催）出品数三四〇点

作東町文化協会だより（年二回）発行を決定。十一月創刊号を発行。

43年7月

11月

44年6月

8月

11月

45年8月

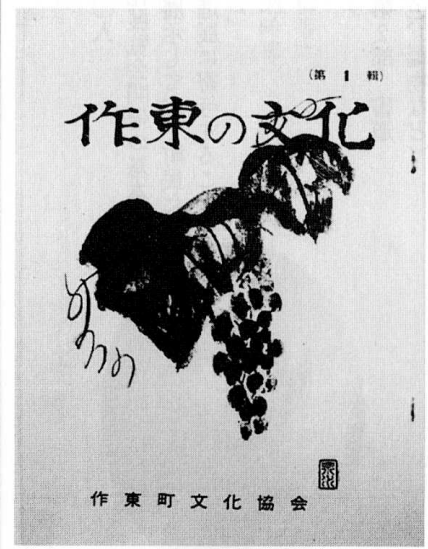
年 月

事

柄

45年 9月
11月
46年 11月
47年 2月
47年 11月
48年 7月
49年 11月
50年 10月
11月

神原正見作東町長に就任。
 第四回文化展覧会開催。(二日～三日)
 第五回文化展覧会開催。(三日～四日) 出品数四七〇点(出品料 無料)
 江見小学校屋内体操場落成。
 第六回文化展覧会を三日～四日に作東中学校屋内体操場と江見小学校屋内体操場の二会場で開催。
 作東町中央公民館落成。
 第七回文化展覧会を三日～四日に作東中、江見小の二会場で開催。 出品点数一、〇〇三点
 第八回文化展覧会を(二日～三日)二会場で開催。 出品点数八〇六点
 中国自動車道開通。【吹田～落合】
 『作東の文化』誌 第一号発刊。
 編集者 岩本文夫 (B5版)



文化誌 第一号誌

51年 11月
11月

52年 6月
6月

53年 1月
11月
10月
9月

54年 7月
11月
10月

11月
11月

『作東の文化』第二号 第十回文化展覧会記念号として発刊。(B5版18ページ)
 (有料配付二〇〇円) 編集者 高田三爾(以後59年度まで)
 第十回文化展覧会を三日～四日に小・中学校の二会場で開催し、小学校会場では津山少年合唱団の合唱や公民館琴講座生による琴と尺八の合同奏が行われた。また、同時に中央公民館に於いては所蔵書画展が文化財保護委員会と共催で開催され、茶席も開設された。
 文化展の出品点数八六九点
 総会に於いて、会則を改正し役員に参与を新設して、役員の充実を図る。
 参与は、次の団体が当たる。(婦人協議会、老人クラブ連合会、文化財保護委員会、青年協議会、商工会、小学校長会、中学校長会)
 副会長に、高田三爾を選任。
 『作東の文化』第三号を発刊。(A5版25ページ) 寄付者名簿掲載。(有料配付二〇〇円)
 第十一回文化展覧会開催(三日～四日) 出品点数九三二点
 文化財保護委員会が所蔵品展を開催。文化協会は後援。
 江見晴則 作東町長に就任。
 『作東の文化』特集(作東の四季) 第四号(A5版36ページ) を発刊。
 寄付者名簿掲載(有料配付三〇〇円)
 第一回文化講演会開催。
 第二回文化講演会開催。
 『作東の文化』特集(夏に想う) 第五号(A5版43ページ) を発刊。
 寄付者名簿掲載(有料配付三五〇円)
 第十三回文化展覧会に子供広場を新設し、人形劇、子供向け漫画映画等の上演のほか、乳幼児のための手作りおもちゃの展示と実演コーナーを加え開催。
 『作東町の歴史』発刊。

年 月

事

柄

55年 10月

『作東の文化』特集（春の随想）第六号に、文化協会の運営資金をつくるため広告を掲載し、広告料五、〇〇〇円（一、〇〇〇円をいただく。（有料配付三〇〇円））

56年 11月

第十四回文化展覧会の開催期日を農繁期を避けるため十一月二十二日（二十三日に変更。第一回作東町ふるさと祭り）と第十五回文化展覧会を共同開催。会場は、江見小学校と中央公民館に変更。（ふるさと祭りの二行事となる）また、文化講演会（作東中学校）も町の開催となる。

57年 4月

『作東の文化』第七号より特集をやめ発刊。（A5版60ページ） 広告掲載（有料配付三〇〇円） 総会により文化協会会長に、沖田正秀を選任。

11月

副会長に、里見 明・高田三爾を選任。

58年 4月

『作東の文化』第八号（A5版68ページ） 発刊。

11月

広告掲載（有料配付二〇〇円）

59年 7月

作東町より文化協会に委託料が交付される。

9月

作東町制三十周年記念式典。

10月

町村合併三十周年記念事業として十月九日（十日）に文化展覧会開催。

59年 7月

映像部を新設。（ビデオクラブ会員募集）

7月

作東海洋センター落成。

10月

『作東の文化』第十号記念号を発刊。（A5版60ページ）

60年 4月

有料配付二〇〇円

4月

副会長に、三木 貢を選任。

60年 4月

『作東の文化』第十一号より編集者

4月

文芸部長 山本 章を選任。



沖田正秀

7月

日韓書画交流展を中央公民館に於いて開催。（七月二十七日（二十八日）

11月

第十九回文化展覧会の会場を海洋センターに移して開催。

61年 4月

文化協会会員募集開始。（会費五〇〇円*二口以上、賛助会員五〇〇円）

10月

『作東の文化』第十二号より会員名簿と歴史年表掲載。（会員数二九九人）

62年 4月

文化協会会長に、里見 明を選任。

11月

副会長に、圓東順一、岡本 長を選任。

63年 3月

『作東の文化』第十三号を町内全戸に配付。

4月

書初め書画展を改め第一回『春の書画展』開催。

63年 4月

会則を改正して、芸能部を追加し、年会費一口一、〇〇〇円。

4月

文化協会の活動を拡げるため、支部（学区単位）組織を創設し、支部長を置き、各部落には評議員を置いて地域に即した活動を進めることとした。

4月

各支部長には、
・江見地区 末宗秀夫
・豊野地区 久保照夫
・土居地区 井崎 修
・福山地区 香山勇作
・栗井地区 原 利保
・吉野地区 小林良矣

4月

副会長に、長家清子を選任。

7月

第一回会員研修旅行を実施。

4月

（ならシルクロード博）

4月

第二回『春の書画写真展』開催。

9月

副会長に、途田直子を選任。

平成元年 3月

第二回会員研修旅行を実施。

4月

（京都嵯峨野めぐり）

3年 4月

第三回春の書画写真展と文化講演会を開催。

2年 3月

作東バレンタインプラザ落成。

3年 4月

開催。



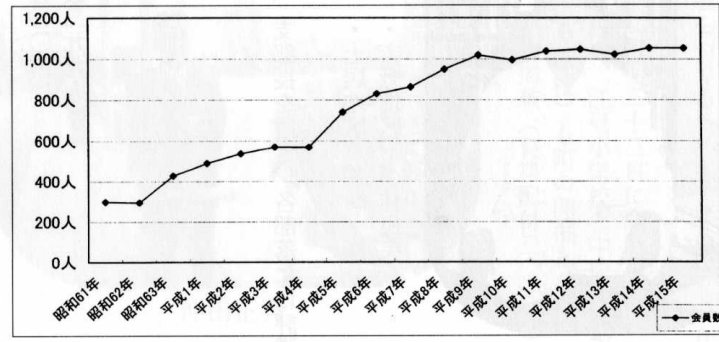
里見 明

年
月

事

柄

4年4月 吉野支部長に、小坂田 貢就任。
 第三回吟詩舞道大会を江見小学校屋内体操場に於いて開催。
 作東町役場庁舎移転。
 5年1月 作東町制四十周年記念式典。
 5年4月 副会長に、安東靖子を選任。
 6年4月 文化芸術センター落成。
 7年4月 粟井支部長に、松本寿豊就任。
 7年5月 第一回『春の絵画展』日本画グループ展始まる。
 7年7月 第二回『春の絵画展』油彩グループ展開催。
 8年5月 第六回吟剣詩舞発表会開催。
 9年3月 納涼茶華道展開催。
 9年4月 古文書を読む会始まる。
 10年9月 第三回『春の絵画展』日本画・洋画グループ展開催。
 11年4月 『春の書・画・写真展』及び文化講演会開催。
 10年4月 文化協会会員数一、〇〇〇人を突破。
 10年10月 会員研修旅行に一二九名の参加があり、バス三台で広島県瀬戸田町《平山郁夫美術館等》へ実施。
 春名 宏作東町長に就任。
 文化協会会長に、圓東順一を選任。
 副会長に、横山 猛・真野みよ子を選任。
 土居支部長に、根岸劫男就任。
 『作東の文化』第二十五号より文化協会の事業及び決算報告を掲載。



作東町文化協会会員数推移

12年3月 『春の書画写真展』及び文化講演会開催。
 12年4月 『作東の文化』第二十六号より編集委員長に谷口重人就任。
 13年4月 阿部正登(雲魚)米寿記念展開催。
 14年4月 美作町湯郷 文化センターに於いて吉本興業の前座を芸能部が務める。
 14年4月 第三回舞の会開催。
 15年4月 情報映像部文化協会のホームページを開設。
 15年4月 作東バレンタインプラザの展示場に会員の作品を月替わりに継続展示。
 16年4月 土居支部長に、春名貞和就任。 福山支部長に、青山時弘就任。
 16年10月 歴史民俗資料館落成、開館。
 『作東の文化』第三十号文化誌(三十周年記念号) 発刊。
 連続して開催して来た文化展覧会が第三十八回を迎えた。



圓東順一

(敬称略)

祈感寸言

感想や批評を文章で表現する

簡単そうで難しい

しかし文章化されることで

新たな感想や批評が生まれる



書道 妹尾美山

も出来ます。

藤田祐子の「ちびっこお遍路よっくんが行く」はよっくんのお父さんが亡くなられ、おばあさんと孫のよっくんが、三歳から九歳までの間何回も四国遍路を巡ったお話です。

また、読みたい本を予約して、県文化センターや県内の図書館から借りていただくことも出来ます。

長谷川撰子の「人形の旅立ち」
「勝央図書館」は荒神さんの楠の古木のうろの海につきつき旅立っていきおひなさんの幻想的なお話です。
荒川じんべいの「パソコンでいきいき人生」「県文化センター」にはパソコンをくらしに生かすいろいろなアイデアがのっています。

平成十三年七月から作東町立図書館のホームページが開設され、図書館の検索や予約ができるようになって

作東町立図書館を利用して

光井和彦

平成五年、県文化センターの自動車文庫を利用しながら、町立図書館を待ち望んでいました。平成五年十一月一日新しい図書館が開館しました。一万三千冊もの新しい本が並んだ書架の本を手に取り、閲覧机でゆっくり読む楽しみに心が躍りました。貸し出すのもバーコードで行われ、

以前貸し出しカードに手書きしていたことと較べ夢のようでした。たくさんのお本が分類され書架に並べてあるのを、読みたい本を探して借りたものです。

灰谷健次郎「天の瞳」シリーズ幼年編1・2、少年編1・2、成長編1・2、あすなる編1・2と年一冊

ずつくらい出版・購入されるたびに、主人公倫太郎の成長ぶりを楽しみに読み続けています。

自動車文庫が中止になり、替わって岡山県総合文化センターの本が期間を決めて町立図書館に置かれるようになりました。その本も借りて読んでいます。

高島俊男の「漢字語源の筋がいい」「師走先生多忙説」とか、「ヒロシとは俺のことかと菊池寛」には面白い説がのべられています。

新聞やテレビをみていていいなあと思う本や読みたいと思う本があった場合、購入希望を申し出れば予算の許す範囲内で購入してもらおうこと

います。

図書の検索については「岡山県図書館横断検索システム」を使えば、県下の図書館にその本があるかどうか、またたく間にわかります。その探した本を作東町立図書館に頼めば借りていただけます。

平成十六年九月二十五日には新しい岡山県立図書館が開館します。利用者登録をしておけばインターネット予約が出来るようになります。

現在では作東町立図書館の蔵書数三万六千六百五十冊、利用者カード約三千、利用者人数 年間約二万四千人、月間約二千人とのことです。

これからも大勢の人が図書館を利用し読書の世界を拡げていってほしいと思っています。

暦

井上健一

今年は何年。しかし何故四年に一度閏年があるのだろうか？ 何故二月だけが平年は二八日なのだろうか？ 生活必需品の暦が作られた目的はなんだっただろうか？ こんな単純な発想で暦のルーツを調べてみた。

現在の暦はあらゆる占いをかき集めて冊子にまとめたものと言える。古代のエジプトではナイル川の氾濫に頭を痛めていた。農業を覚えて、作物を栽培してもナイル川が一瞬で飲み込んでしまうからだ。そこで当時の人々はどんな時に川が氾濫するかを調べる事にした。調べが進むと、太陽の出入りする位置が少しずつ変化している事に気がついた。更

に、ある時点まで来ると太陽は元の位置まで戻ってきた。日数を数えると三六五日になった。太陽の位置でナイル川の氾濫の時期をつかむ事ができるようになった。作物のまき時や取り入れの時期も判った。そこで種のまきはじめをスタートとして三六五日目を終了とした。太陽の出る位置を調べるうちに、昼夜の長さが少しずつ変化してくる事にも気が付いた。これが春分の日、夏至、秋分の日、冬至である。ところが数年経つと、また太陽の出る位置にずれがある事に気づいた。そこで四年に一度一日加えると問題は解決した。スタートが現在の三月であり、終了が

二月になる。平年は二八日で終了し、閏年は二九日となった。

一方、日本には同じ種まきの時期をスタートラインにし、満月から次の満月までの一カ月を基礎にし、昼夜の長さや季節の変化を二四分割した陰暦がインド、中国方面から既に到着していた。

陰暦と太陽暦との大きな違いは閏年である。月の公転周期は、二九・五三日である。計算すると、一年で約一〇日のズレが起こることになる。これを修正するために三年毎に閏月が設けられた。昼夜の長さや、季節の変化を考慮しているので、閏月は同じ月に固定されない。これに大安や仏滅等の六輝、三年ふさがり等の方位、星座や九星等の占いを加え、太陽暦とドッキングしたものが現在の暦である。

しかし、現在の一カ月がどうしてできたのか？ については勉強不足である。

楽しみ

井口祥子

娘の出産祝いに金沢へ夫とドライブし、途中福井県南条町の南条サービシエリアに立ち寄った。レストランの壁絵に花はすが描かれ、その絵ひとつひとつに「たのしみは……」から始まる和歌が詠まれていた。作者は国文学者として活躍された橘曙覧「タチバナのアケミ」という歌人で、その一句一句にうなずきつつ、越前そばをいただいた。

・たのしみは意にかなう山水のあたり
しずかに見てありくとき

・たのしみは心をおかぬ友だちと
笑ひかたりて腹をよるとき
・たのしみは朝いでて昨日まで
無りし花の咲ける見る時
・たのしみは空暖かにうら晴し
春秋の日に出でありく時
・たのしみは物識人に稀にあひて
古しへ今を語りあふとき
この五句の中でも「たのしみは朝いでて昨日まで無りし花の咲ける見る時」という句は、私の一番共感した句であった。

野菜や花の種子を蒔いて何日も何

日も水をやり続け、朝そこへ行行ってふと見ると、小さな芽や双葉がよきよきと出ているのを見つけた時、思わず「やっと出たのね。」と、うれしさがこみ上げてくる。そして夫や近所の親しい人に「きゅうりの芽が出たのよ。」とか「茄子やトマトの芽が出たのよ。」と告げたくなり、その芽の出た所まで引っ張って行き、一緒に喜んでもらいたくなってくる。

こんなにやく等芋類の芽はなかなか出て来なくて、やっと三角頭をのぞかせた時の喜びは大きい。

また、季節を告げるかのように自然に咲く野山の花を見る時、名も知らぬ小さい花でもいつの間にか花開き、精一杯咲いているようでおしくなってくる。雨降り後の野山の緑、岸辺の花の彩りは何ともいえない。

い。

畑に作っている野菜も毎日手抜きはできない。日照りが続けば、毎日朝晩水やりをしたり胡瓜のつるをくくったり、キャベツの青虫を見つけてやっつけたり、トマトの支えをしてやったり、汗を流しつつ草抜きをしたり世話をする事も楽しい。

しかし初めてカボチャが黄色い大きな花をつけたり、初めて胡瓜が実をつけた時、世話をしたものほど喜びは倍増する。

近所の幼稚園に行っている子が、「おばちゃん、ナスの実ができていよよ。」と小さい実を見つけて教えてくれる。幼い子はなかなか目ざとく見つけるのが早い。

変化のない日々のくらしであるけれども橘曙覧の詠んだ歌のように「無りし花の咲けるを見る時」を喜

絆

稲尾 康男

かれこれ四十五年程前のこと、養母が眼の病で、ある病院で手術をし、入院中のことです。二、三歳だった初孫を連れて見舞いに行った。部屋へ入るなり、「バアチャン。」と声をあげ養母の膝にはい上がった。当時の医療は大変だったと思う。分厚く巻かれた包帯は痛々しく、重苦しく感じた。

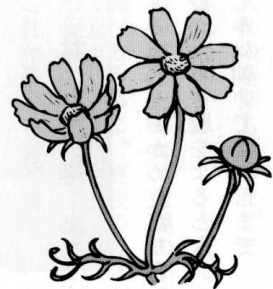
養母の家は五十年来子供の出生がなく、膝の孫のぬくもりはよろこびと感動をうんだにちがいない。包帯の奥に溢れる感涙を見た気がした。

まさに親子の絆だ。

あれから幾十年が過ぎた。



日本画 安東靖子



びとして日々を楽しく暮らしたい。

随筆 随想

おりにふれて

感じたことや

見聞・体験を

なにくれとなく

書き綴る

思いのままに



生花 春名由紀

妻百句

原 洋 一

身の程知らずの未知への興味から
始めた川柳であるが、彷徨い続けて
六年にもなってしまった。

俳句は自然を詠み、川柳は人を詠
むという。自分にとって身近な人と
いうとどうしても妻になり、妻の句
が多い。それならいっそ、
「ユーモアと少し嘘たし妻を詠む」
で妻の春夏秋冬を集めてみた。

(春)

いい年の初めだ妻の薄化粧
春を待つ妻に少女の影揺れる
春の陽に妻のピアスの自己主張
春一番言い寄る妻の膝頭
介錯の位置で私を見る妻
春愁の白さが目立つ妻の髪

他人は他人夫は夫と言える妻

花の命見ている妻の老眼鏡

病癒え妻の化粧や寒明くる

スクランブルエッグのような妻の部屋

愛妻を拉致する春の新刊書

これからも頼りは妻の目分量

ネジ巻きは妻に任せた古時計

春を待つ野良着繕う妻の糸

妻の留守僕の頭にうすほこり

贅沢が出来ない妻の計算機

他人より痛い視線が妻にある

勝てないとあきらめ妻の尻の下

依万智風に記念日増やす妻の愛

早春の妻の乳房にあるうずき

紅少し血の気も少し妻の春

おさがりはいつも妻から春の風

(夏)

おかしくて悲しい妻の三面鏡
妻にやる四つ葉探して日が暮れて
灯を消して妻が女になる弥生

瓜畑に妻の声する朝涼し

退職後妻のリズムで生きている

賞味期限妻には妻の舌と鼻

ときめきを忘れた妻の背の鈕

炎天を翔んでいる妻無私無欲

妻は今日僕は明日に生きる人

僕という絶滅危惧種守る妻

妻と打つボールコートで弾まない

いい朝だ妻の鼻歌聞こえてる

妻元氣玄関で待つ僕の靴

妻の掌の中で弾んでいる私

妻の笑顔朝の空気を軽くする

夏瘦せず妻畑を打つ草を引く

青虫を許さぬ妻のピンセット

選んだのは妻の笑顔と健康美

生きていることの幸せ妻笑顔

共に生き楽しむ妻が居てくれる
よく食べてよく寝る妻はよく動く
老人を見る目で僕を見てる妻
妻が持つぴたりと弱点指す磁石
片棒をかっぎ文句を言う愚妻
妻無口異常信号要注意
妻の皺増やして今日までのほほんと
いつ聞こう幸せだったかと妻に
妻に汗拭いてもらって夏がゆく

(秋)

寝顔から女が消える妻の秋
妻に贈る秋の叙勲のありがとう
料理上手の妻に灰汁抜きされた僕
一人居になればこんなか妻の留守
妻を盾に世間の風を避けてます
遠い日を妻が覗いている鏡
図書館の南の窓に妻がいる
新涼や妻のあたらし化粧水
ごくろうさん妻の一言桐一葉
今日はいいい日妻が厨で弾んでる

カルチャーの妻が置いてく食事メモ
錆びそうな私を磨く妻の櫛
バイキング女を捨てて妻が立つ

言い訳はしないと妻の針仕事
小説に夢中の妻の家事放棄
習うより慣れろと妻の叱咤とぶ
何も言わぬ妻の静かなプレッシャー
念入りに爪研ぐ妻の夜長かな
割烹着脱いで女に戻る妻
脱ぎ捨てし妻のセーター菊月夜
言い訳の裾を踏んでる妻の足
幸せだろう妻の腹部にある余裕
妻の目には寂しがり屋と見える僕
走り続けた私にタオル投げる妻
妻もまた夜更かししてる秋灯火

(冬)

十二月微熱の妻にあるほてり
湯豆腐の湯気の向こうに妻の顔
ポケットで踊る妻へのプレゼント
レフリーの位置に立ってる妻がいる

耐えたのは私ですよと冬の妻
こんなにも身近に居るのに自分に
とって妻とは不可解な生きものであ
る。

「妻百句詠んでも解けぬ妻の謎」

解けないからこそ、これからもま
だ妻を詠むことになるだろう。実は

煮崩れのしない木綿の妻がいい
父さんと呼ぶ妻のぬるい愛

妻の部屋夢のかけらが落ちて
まだ小骨気になる妻の魚料理
赤い糸手綱に編んだ妻の技
引出しに粗品溜め込む妻の暮れ
ストーブを抱いて着替えの妻の朝
一杯のお茶で済まない妻の愚痴
ほおれん草の茹で加減で知る妻の愛
温かい妻の朝餉にある答え
子離れはできても出来ぬ妻離れ
心地よし操る妻の糸任せ
喜んであなたの膝で猫になる
ブラウスに春待つ心たたむ妻
小さめの愛を欲しがると冬の妻
妻の指削除キをいつ叩く
大阪の女で値切る妻の声
ふしようふずいとルビふる妻の太い指
外は雪妻と菜園日誌繰る
妻の背の小さきと思う冬ざるる

妻を詠むことによって見えてくるの
は自分ではないかと最近思い始めて
いる。

「妻百句君を見つめた私の眼」

いつまでも私の川柳の素材として
元気で居て欲しいと願っている。

随想

江見英雄

私は以前から町教育委員会やNH
Kの講座で古文書を学んでいます。
生家の近くに天台宗の八塔寺があり
今は在村檀家は三戸とかだ。
文献に拠れば備前岡山藩主池田光
政侯が一六二五年寺領三六石余、ま
た一六四五年には梵鐘をも寄進され
ている。又最後の藩主池田章政侯は

金箔の寺号札を献納されている。話
は前後するが九代藩主茂政侯は水戸
から迎えた。時の將軍徳川慶喜公の
弟である。幕末尊王攘夷だとの声
姦しい時此の人を藩主としていたら
悪くすると朝敵になる虞れがあった。
そこで家老井木某は茂政侯に隠居を
願う支藩備中鴨方藩主たりし章政侯

を迎えて一〇代藩主とした。そして
時の流れに逆らわず江戸進撃をも果
たしどうにか朝敵の汚名をかぶらず
に済む。また生家の近くに犬養木堂
等と自由民権運動で活躍した第四代
岡山県議会議長をつとめた三村久吾
翁の家もあり今は県の外人の為の研
修センターになっているようだ。
八塔寺山は標高五三九米麓の村は
四〇〇米位の地か。何しろ此の部落
は岡山県の第一次ふるさと村に指定
され萱葺の民家が点在している。よ
く晴れた日には遠く屋島の沖を行き
交う舟の白帆が見えまた赤穂の坂越
の浜も見える。子供の頃海の水はな
ぜこちらに流れて来ないのかと思
議に思った。
津山へ森忠政侯が入国にあたって
も様々な苦勞があったようだ。私宅
の曾祖母は勝田町久賀の生まれだが

森忠政侯入国に際しそれまで一〇代位名乗っていた森姓を新入りの殿様に憚り四、五代枝とし、殿様が松平氏に替わると元の森に戻している。墓石で明らかだ。

それにしても池田光政侯は祖父信輝父輝政等の墓所を和意谷に移し津田永忠に守らせた。その外、閑谷学校を創設させて比類なき庶民教育をし百間川を開削して岡山市民を水害から守った。饑饉や農地造成等膨大なる資金は、千姫やその娘勝子（光政夫人）を通じて多大の資金を借り入れ、又永忠は光政長女の本田家の婚礼支度金から融資を受け、広く農民に低利貸し付けなど行った。社会米という。私は、平成八年、津田氏等が延々二〇キロ近く野や山を開削し或いは河をわたり合流し或いは別れ吉井川から岡山平野へ水を引いた

と医療に必要な医薬品として使用されている麻葉が良いとの情報を得たので、ケシ栽培を試作する計画をした。

初めての作物であり、栽培場所、その種子の所在、栽培方法など、全く不明であった。栽培は農林省所管でなく、厚生省であるので、栽培方法も無く行き詰まっていた時、ある大学が少量の種子を下さったので、喜んで試作した。しかし、一本も発芽せず第一段階で失敗であった。翌年和歌山県の有田で栽培していることが分かり、役場の人と視察に行き、無理に頼み封筒の半分位の種子を確保出来た。昭和二十七年に試作に着手、何とか発芽して試験的に栽培の方法も研究し、何とかあへんを少量収穫した。

それ以来、英田郡に栽培の協力者

大事業の跡を吉井なる取水口へ行ってみた。光政侯にしる永忠にしる勝れて石工河内屋治兵衛との出合いがあったからこそ出来たのだ。人は出合いが最も大切だという事を知る。永忠は往年二代藩主綱政侯の信頼を重ねて天下の名園後楽園を築造している。その関わる事業は、吉備津彦神社の造営、牛窓港の改修、財政再建、飢饉対策等枚挙に暇がない。私は、今年一月十日和気町奴久谷の

ケシ栽培（遺稿）

長家 博志

昭和二十五年頃、第二次世界大戦による食糧不足から、我が国の食糧の確保の方向が見え始めた。米は日本の基本的食糧の適地適産であり、水田の裏作は麦作であると、農家は

食糧増産に努力した。

その時代、裏作の麦作に不安感があったので、麦作にかわる作物はないかと思考研究をしていた。食糧は大切であるが、社会が安定してくる

も出来て栽培面積も五ヘクタールに増え、栽培方法も何とか成功した。

農林省の米麦の価格は上昇したが厚生省所管のケシの価格は上がらず、一方、農業の近代化、多角経営の波に押されてケシ栽培は取り残され、栽培者は減った。

ケシ栽培の意義は種子や品種、栽培技術の保存で、営利追求を度外視して国家的見地に立った使命感を持たなければ、ケシ栽培は成り立たない。ケシ栽培は食糧でなく、医薬品として人の生命にかかわる大切な作物であることを再認識されることを希望する。今や幻のケシとなるかも知れない。

ケシの概要を参考に記すと、麻葉のあへんとして取り扱われるのは一重の花である。二重多重の花はあへん法として取り扱いされない。来歴

津田家の墓参を果たした。閑谷学校や和意谷へは何回か足を運んだ。次の書籍等は皆さんに是非にと愛読を進める。

一、山陽新聞社編閑谷学校ゆかりの人々 三二九頁

一、岡山平野鳥瞰記津田永忠と熊沢蕃山

これは中国四国農地事務局編です。一、岡山人物風土記 県広報協会編 二六八頁

は地中海の地方の原産で、紀元前に知られ、九世紀には栽培されていた。種子が食料としてギリシャで利用されたのは二千年前であった。ケシの

我が国への渡来は中国からとも、ポルトガルからとも言われるが、足利時代に津軽地方で栽培されていた。その後天保年間に大阪商人により津

軽から三島地方に持ち込まれ、明治に入って隆盛を極めた。大正の初め和歌山日高地方に栽培を奨励され、温暖な気候と排水良好な土質、石灰含量の多い所で好成績であった。昭和十三年には日高有田郡で全国の六十%を占めた。戦後ケシ栽培が再開され、和歌山県では昭和三十五年最盛期で一九〇〇ヘクタールも栽培された。

現在は、作東町、大学、研究機関で栽培されている。栽培のケシは一

貫種で純白の四弁の大きな花を一斉に咲かせ美しい田園風景を描いてくれる。



写真 末元正和

我が家のI T革命

中田澄子

畑仕事の手を休めて、県道の方をぼおーっと眺めていると、宅急便のトラックが走って行くのが見えました。あの宅急便会社の車体に付いている「サークルの中に猫二ひき」のマーク。テレビコマージュの「一步前へ！」のフレーズと共に子猫がサークルからずれて少し前に出ていたあの図、消えてから大分になるなあ、日本の経済なかなか上向かないなあと、お気楽にぼんやり思ったりしていました。ゴウゴウと我が家の山道を車が登って来る音と共に番犬二ひきがけたたましく吠え始めました。そしてあの猫二ひきのマークの車が見えて来ました。我が家への配

達物らしく、荷物は配達員が重そうに抱え込んで三個もあります。精密機械ですので内迄運んであげましようと運び入れてくれました。あゝ、そうか、一か月程前に主人が東京に住んでいる息子との電話で、インターネットの機械を新しいものに替えるので、いらなくなった古い機械で少し遊んでみないか、老化防止の為に、又これからは利用した方が便利なものやで、と進める話をしていたので、機械類にあまり強くない主人は気乗りしない返事をしていたのですが、こうして現物が届いてしまったのです。

幾重にも包み込まれたショック緩

和包装資材を取り除くと、機械と共に

に黄白青緑とカラフルな配線コードに数字が打たれた札が付いた物が出て来ました。これを見た主人はもう観念し、仮のインターネット台に機器類を乗せ、取り付け方を聞くべく息子に電話しました。コードの色と数字合わせにより機械とコードを接続せよとの事ようです。なかなか指示の意味を理解出来ない主人は、だんだんいらだって来ます。電話は一時間以上にもなるでしょうか。今月のNTT料金は高くなるなあと思は思えばかりです。「何やて！お前の言うつとる事わからへんは！はっきり説明せー！」と息子にどなる主人。自分の説明が父親に通じないもどかしさに、それでも親には使ってはならない言葉がある息子は、グツと我慢して、休憩タイムを申し出ま

した。

三〇分程後、息子から電話が掛かり「お父さんどないやー？」と休憩中も機械を触っていた主人も、「そやな、大分かつこ付いてきたな」と答える。配線も所定の場所に接続され、いよいよモニター画面を写し出す事になりました。息子「まず、マウスを盤の上に置いてくれる」主人「ほい、置いた」息子「マウスを動かしてくれる、画面に矢印が見えてるか？マウスの左側をクリックしてくねん」主人「そんな事ぐらいい知ってる！そやけどちよろちよろするだけやで」息子「矢印を画面の左上の角にもって行ってくれる。出来たあ？」主人「左側をクリックするねんやろ。矢印がちよろちよろ動いてるだけで」息子「なんでやねん！」主人

「左側をクリックしとるがなあ！」又二人の間が険悪になってきました。今月息子のNTT料金大分負担させると私は思うのでした。出世払いの分から差し引いといてと納得します。息子「お父さんマウスどんな持ち方しとるのん？」主人「ちゃんと持つとるで。そやけどマウスのコードが机の角にこすれて動かしにくいねん」息子「机の角にこすれる？机の上ちゃんと整理しとるか？」主人「マウスの尻からコードが垂れとるやろ。それが机の角に当たるねん」息子「？マウスの尻？一体どんな置き方しとるねん」マウスの配線をしっぱと見た私がマウスは配線の下に垂らして盤の上に置くのだと主張したのです。マウスは通常の逆向きに持って操作していたのです。左側をクリックは右側をクリックしてい

たのです。事情を知った息子は「信じられへん！」と三人で爆笑の後なんとか設置は完了したのです。今から四年程前の話、そして今で

希望をもって生きる

加藤 美雪

は中古の機械も買い替え、私共であれば便利な情報源として活用しています。気ぜわしくなったというデメリットも背負いながら。

す。

人生八十年とは申しませんが、私も満八十三歳を迎えました。人生も後僅か。せめて母の満九十九歳没までと思っても、それ程生かされることはない。せめて九十歳と思っても後十年と思えばもう何もし始めようとは思わない。それに身体は一年一年老化して、気分はまだまだあれこれ出来るように思えるけれど、柔軟に体が動かない。今まで手につけた二畝余りの畠で野菜作りがやっとの事で楽しみも多いので続けておりま

ある日こんなことが浮かんで来ました。私は母校大阪府立茨木高等学校（現在府立春日丘高等学校）に昭和九年三月に入学しましたが、其の年九月に室戸台風の為、二階建木造校舎が倒壊した。教師一名、給仕一名、当時二年生の学友四名の尊い命を奪われました。悲しみの中、昭和十二年に府下随一の三階建の鉄筋の白亜の殿堂が聳え建った。廊下は桜の市松板、掃除もよく磨いて、大

切にしております。昭和二十三年四月学制改革により、新制高等学校として発足し、男女共学になりましたが、だんだん校舎も傷み、生徒数も増しとうとう表側の運動場へ新しく四階建の校舎が出来ました。思い出の本館もとうとう古くなり、改築され、駐車場も地下に出来、創立九十三年を迎えた。もうあと七年すれば百周年、私が九十歳になるのです。

どうかして此の記念祭には岡山市に居住されているクラスメイトと参加しようとする日そんな事を話し合った。私の母も九十歳で東京へ新幹線で自分の弟の一周忌に私が同伴して行きましたのを思い出し、此の日を楽しみに体を大切にしたいと思います。一年に一度の藤蔭会誌（同窓会

誌）が送られて来ますが、だんだんと若い人になって、恩師も逝去され残念な事ですがこれもいたしかたのない事です。（私の父も恩師の一人でした。）

私の母校現在大阪府立春日丘高校が大阪府教育委員会により昨年から五年間エルハイスクールに指定された。府立高校として先生方の熱心な取り組みを目の当たりにして恩師という言葉の意味深さを感じ、我が母校にさらなる誇りを持つ事が出来ます。

エルハイスクールとは「二十一世紀をリードする創造力溢れた人材や先端的な科学技術を支える人材の育成：」「次の時代をリードするにふさわしい生涯にわたって主体的に学ぶ力とそれを支える体力、精神力、他者を思いやる事の出来る豊かな心や洗練された感性などを身につけさ

せる為に」と教育委員会のホームページに書かれている。難しく述べられているが、めまぐるしく変化する現代社会に対応出来る高校生を育成する為に様々な取り組みを実践して行くのがエルハイスクールのようです。三つのキーワードからエルハイスクールと呼ばれている。そのキーワードとは「次代をリードするリーダーニング」「生涯学習ライフロングラーニング」「幅広い教育リテラシー」の三つであり、それぞれの頭文字の「エル」から付けられたものです。

最後にもう一つ申し添えたい事があります。昨年十二月二十三日作東バレンタインホテルのイベントとしてトワホールで礼拝が始まり、外に出た時には一面にキャンドルイルミネーションが点灯し、やがてプロの歌手によるすばらしい歌声が響き、

打ち上げ花火もあがりました。すばらしい歌手、その人は私達母校の後輩で昭和五十三年卒の女性の方で、岡山市に現在お住まいの方でした。母校は大阪にありまして身近に我が町へ来ていただいたという事は大変はれある事と喜ばしい事でした。年取れど希望をもちて夏すぎる。



洋画 小林道幸

米のなる木の唄の思い出

春名貞女

田植えのときも終わり、新聞紙上に幼稚園や小学校では体験学習でどろんこになり田植えなどの事が記事にのりほえましき事です。只今は天候にめぐまれ生育良く収穫の秋も近くなりました。

思えば四十三年前、昭和三十七年岡山国体が行われました。当時としてはテレビも無し、新聞にて、どこで何の競技が行われたとか見るくらいのものでした。

いよいよ平成十七年度待ちに待った岡山国体が行われる事となり、楽しみにしております。私も八十四才にもなりまして一生の中に二回の国体の様子を見せて頂く事を大変な幸

体育の事には無知の私達ですが、この日の来るのを楽しみにしております。拙いペンを取りました。御笑覧下さい。

どこの地方でも、山や川にまつわる民話や伝説は多くある。それは架空の話とわかっていてもなにか温かみを感じる。

那岐山、それは私達の住む美作地方はもとより遠く備前の方からも眺められる山だ。この山にも多くの民話や伝説がある。

なかでも三穂太郎やこれにまつわる蛇淵の話、また那岐山が作州で一番背が高いと聞いていたら、後山と

せに思っ居ます。当時の土居町の催しとして「岡山小唄」の踊りを婦人会でする事となり、土居町役場の若い主事さんがみえて夜お宮の社務所で岡山小唄のおどりを教えて頂きました。それを土居中学校の校庭（現在のゲートボール場）で、土居中の婦人会として盛大に披露した事を覚えています。皆に話せば「そんな事あったかしら」と言う人ばかりです。その唄の内容が面白く、私は今の時代と比較して考えてみますとおかしくなります。徳川末期の唄と聞いております。御殿奥の何も知らないお姫様の唄らしく、次に此の唄を書いてみますと、

一、鳥城一はけ さぎりの中に
三十二万石 夢の後
私しや備前の 岡山育ち
米のなる木は まだ知らぬ
萩が袖引く 虫が呼ぶ
私しや備前の 岡山育ち
米のなる木は まだ知らぬ
三、青い水の面に オールが浮かびや
美行土手には 花吹雪
私しや備前の 岡山育ち
米のなる木は まだ知らぬ

◎岡山小唄
四十三年前の事ですが、現在の児童達に此の唄を聞かせたら何と言うでしょう。「おばあちゃん変な唄じゃなあ」と笑うでしょう。時代の移り変わりの事をしみじみ感じるこの頃でございます。

那岐山の陰

衣笠隼巳

て悔しくて泣いた。泣き山がナギ山になったとか。
私はよく計画なしに思いつくまま行動することがある。五月の晴れた日、急に思いついて那岐山へ登ることにした。妻に簡単な弁当とお茶を用意させ、高円の登山道駐車場へ着いたのは九時半だった。まあ二時間あれば登れるだろうと思っ登りはじめたが山頂が間近に見えながら、

なかなか足の方が前に進まない。特に妻の方はエンジンが焼けて、休み

休みやつと昼前に頂上へ着いた。
熊笹が強風の為刈り込まれたようになって美しい。多少雲があったが、山陽山陰の眺望は疲れを忘れさせてくれた。そしてこんな低い山でも結構登山気分を味わうことが出来た。整備された山小屋で昼食の後山頂へ。山頂には標高を示した新しい石碑が置いてある。なんでも最近この山が高くなったらしい。人工衛星を使って正確に測ったところ十五メートル程高かったとか。満喫したので下山することにした。下りは楽だと思っいたらこれが大変だった。ギャチャェンジがうまうまいかず足がガクガクし、じつに難しい。
下るにしたがって灌木の背も高くなり、やがて人工林の中へ入った。ところがあれ程眩しかった日光は遮られ、薄暗くさえ感じられた。そ

れは植林が密植で手入れもされず、下草も生えてない状態だ。そして所々に切り倒された巨木が無残に横たわっている。なんと光景かと思つた。

私は昔、昭和三十年頃一度登山し同じコースを下りた。その時は鬱蒼とした原生林があり灌木や蔓につかまって下りたものだ。あまりにも様変わりしている。細くて曲がり、先の方に少しばかり葉がつき、地表に出ている根っこ。この松が後五十年経っても用材になるとは思えなかった。だがこれを植林した当時は雑木林は金にならないということ、杉、桧を植えたものだろうが今の情勢では手入れもままならないであろう。この朽ち果てた巨木がああ原生林を偲ばせる。そして二度とあの原生林の姿に戻ることはないだろう。惜しいことをしたものだと思つた。

高梁川ぞいに下る道は車の通行量も少なく時間をかけてゆっくり進め、対岸の山桜の美しい所では車を停めて眺め、車寄せのある所では木陰に車を止めて小休止しながら行く。途中、昨年おきた採石場の崩落現場の所を通り、あの土の中のどこかにもう一人の犠牲者が居る事を話し、鬼の城への標識のある所では、来年は遊歩道が出来るようなので、必ず元気で行って見ようネと話し、とても嬉しそうに喜んでくれた。途中の休憩所の木陰でゆっくり昼食を済ませ、岡山の子供の所へ行く。大きくなつた孫達に迎えられ握手をしている主人はとても満足そうだった。階段を上がる事が出来なくなっていた主人は折角来ながら子供達の家にも上らずそのまま帰途についた。

県道美作線を走りながら、息子が

山頂での爽快な気持ち、植林の中の暗い気持ち、複雑な気持ちで帰路へ。今日一日金も使わず遊んだのだからまあいいか……と思つたたと

小さな旅の思い出

美作―新見―岡山一周の旅

岩本敏子

例年になく桜の開花が早い四月二日、主人の体調もよく久しぶりに遠くへドライブしようと新見市にある親戚を尋ねることにした。

午前九時いつもの携行品を持って家を出、美作インターから中国自動車道を走る。天気も良く山々には淡いピンク色の桜が至るところに咲き、時速八十キロで走る車のエンジン音が主人にはとても心地よいようであった。大佐パーキングで小休止、主人を車から降りしエリアの中を少し散

ん「止まれ」の赤い旗。結局高くついた登山だった。もう登ることもなからうし、登ろうとも思わない。下から複雑な気持ちで眺めるだけにする。

歩する。再び車で新見インターへ、そこからは目的の家までは僅か五分位だった。折あしく家の方は留守であつたが家の周りが改造されており、表の庭へ車を入れてきていただいた。数年前に我が家から持ち帰っていた鯉が大きくなって居るのを見て主人はとても満足そうだった。留守宅へ長居も出来ず帰路につく。帰りは急ぐ旅でもないで、主人の希望どおりに久しぶりに国道一八〇号線を岡山まで下ることにした。

大学時代に下宿していた家の近くを通り、懐かしい話をしながら帰る。英田町から河合―福山へまわり四時すぎに帰宅した。主人は少し疲れたようなのでゆっくり休ませ、夕食は外で我が家の桜を見ながら食べ、今夜は夜桜見物だねと言つてとても喜んでくれた。こんな事がずーとずーと続いてほしいと願う一日だった。

(平成十四年四月二日の日記)

今は主人も亡くなり、二人でドライブは出来ませんが、時折主人と一緒に走った道を近くに住む妹達と走ります。僅か二年程の間に、パイパスが出来、大きな建物が出来たりして、そここの変わりように時代の流れを感じる今日この頃です。



書道 井上秀草

歴史紀行

大きなできごと

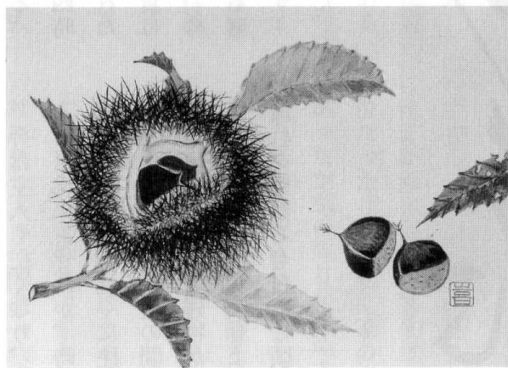
些細な歩み

みな

人間の歴史

かたりべとなって

伝えよう



日本画 寺師喜代美

東備前・美作を通られた 後鳥羽上皇の隠岐配流の道筋

—ほぼ明らかにになってきた—

加藤 芳英

ド」の意に使われるようだ。

後鳥羽天皇は、平家一門が壇ノ浦で滅亡する二年前に即位。後白河法皇死去のあと、三代の天皇にわたる二四年間「院政」を執行。

後鳥羽天皇の御製を先ず一首引用。「奥山のおどろが下も踏みわけて道ある世ぞと人に知らせむ」（新古今和歌集）

歌のころは、「草木乱世の世だが大義、皇（王）道の有る世の中にあることを万民に知らせよう」という思い召しでないか。

皇（王）道Ⅱ「天皇中心に行う中央集権政治」。短距離区間では「皇（王）が通った道Ⅱエンペラー・ロー

一二二二年、後鳥羽上皇らは、源

実朝暗殺をチャンスに北条氏追討の

『承久の乱』を起こしたが、幕府軍

一九万五千人が上京進軍、上皇方は

二万五千人しか動員できずに敗北。

その結果、隠岐に流され十八年後に死去された。

幕府の尼将軍・北条政子のメッセー

ジは、次の三点に要約されうる。農

業従事の関東武士は奮起。

（一）京方の皇（王）権至尊か

（二）鎌倉殿（頼朝）への報恩、

幕府方への結集・至強か

（三）京方につかんとする者はこ

の尼将軍を殺し、鎌倉を焼き払って京に上られよ！

『承久の乱』の結果、京方の領地・莊園が主に西国で三千余か所も没収された。（これは平家没官領五百余ヶ所の数倍。）

地頭制が全国的に至強し、貴族莊園の蚕食化が本格化しつつ、新興武家勢力が王朝貴族の上に立つ、王道軽視の中世新時代の幕開きだ。

さて、私は、この稿において、作東町において、後鳥羽上皇の配流コースの通過点が、「八塔寺⇩柿ヶ原⇩薬水寺⇩」ぐらいしか知られていない点を補充したい。また百十一年後の醍醐天皇西遷コースが創作・ねつ造されたり（例えば南海経由の北路説とか）、上皇と天皇のコースの混同等の伝承の是正に役立てたい。チャンスがあれば後醍醐天皇隠岐配流コー

スや「王道再興」の政治展開につき書き置きたい。

上皇の隠岐配流コースは、古文獻『承久記』では、次の簡略記述があるのみだ。

●「都（鳥羽殿）↓水無瀬↓明石浦↓美作と伯耆の中山↓大八浦（美保関）↓隠岐。」

大阪市大経済学部名誉教授の林直道氏は、一九七〇年頃から二十年間、上皇隠岐配流のコースなどの研究や現地研修調査を重ねられ『日本歴史推理紀行』（一九九一年青木書店）にて率直大胆に発表された。わたしの調査も整頓を加味して、西遷道筋を明確化したい。

七三年前の承久三年七月、後鳥羽上皇は、女房西御方、伊賀局（白拍子亀菊）ら御供数名（三〜四台の輿こし）と、五百名前後の護送部隊で

出発されたのでなからうか。

林直道氏は、鎌倉幕府直属の「通し行進」部隊と、「特定区間だけ協力」の現地軍部隊（一個中隊一八〇人か二個中隊程度）で構成された可能性にふれている。（後醍醐西遷のときは五百騎余）

播磨は海老名兵衛（屋敷は相生市）、津山・院ノ庄あたりで金持兵衛（伯耆の日野町）と引き継ぎしたのでないかと推理している。

護送部隊は、炊飯、宿舎設営、寺を中心とする農民使役動員等の使命も帯びている。

林直道教授は、七月十三日、鳥羽殿を出発した護送部隊が八塔寺へ到着するまでの駅家名、宿を次のように、陸路行進と推理。

●鳥羽殿↓水無瀬殿↓昆陽野（伊丹）↓兵庫↓明石↓賀古↓草上くさかみ（姫路市

本町）↓大市↓布施（竜野市）↓高田（上郡町神明寺）↓野磨（上郡町落地）↓大山寺↓船坂（にある行頭峠）↓南谷（吉永町）↓御所ヶ成なご↓皇坂↓八塔寺。

「行頭峠」通過説は、吉永町史編纂室の仙田美氏と郷土史家・光友和夫氏の発見に基づかれた。八塔寺は聖武天皇勅願の開山。火災で衰微したのを知った頼朝が梶原景時を奉行として十三重塔、七堂伽藍、七十二僧坊を再建。今は常照院など二寺のみだが、常照院の東裏山に「後鳥羽上皇隠岐御遷幸御遺跡皇屋敷」（昭和四十六年観光協会建立）がある。

●八塔寺↓神子塚↓神子ヶ成↓柿ヶ原（作東町）↓薬水寺（鈴家）。柿ヶ原八幡神社境内に「後鳥羽院行宮記念碑」（大正十二年建立）。薬水寺弁天池の水で、後鳥羽上皇や北

条時頼が眼を洗ったという口伝があったそうだ。柿ヶ原に「桜塚」「御子小路」「御子露路」、鈴家に「鳥羽の尾」など地名が残っている。

薬水寺から大原おおはら（美作町）↓金屋↓海内↓林野↓沢（「桜の渡し」）↓梶並川と桜谷川の合流点）のコースでないかと考えられましたが、私は、

●鈴家薬水寺↓関前池（築造和銅五年一七二二年）↓山外野（美作町）白山神社（大化四年蘇我石川磨呂が西越国からの付近に勧請したことと、後鳥羽上皇西遷のとき御駐輦されたことを記刻した碑が昭和十七年に建立されている）↓山口（古くは英田郡の中心といわれる。古墳時代の径十メートル以上の円墳が五基もある。平福にも二十七メートルの前方後円墳など三基あり、山城もあった。英田郡の郡衙が山口か平福にあっ

たとの説あり。）↓平福の「渡り上り」↓一ノ岬↓神宿↓榎原上↓榎原中の「渡里」（笠かけの森）の付近↓明見↓中尾↓上相かみ（間山高福寺に詣られた伝承）↓岡↓黒坂↓川辺（国分寺）↓川崎↓山北（十六夜山に御駐輦）↓総社↓二の宮↓院庄↓坪井↓久世↓三坂↓美甘↓新庄↓四

十曲峠↓金持↓根雨↓安来↓境港↓美保関↓隠岐中ノ島の「崎」に上陸。（八月五日荊田郷の源福寺に入られた。次の一首を島でよまれた。）
「我こそは新島守よ隠岐の海のあらしなみ風心して吹け」後鳥羽院遠島百首（誤り等があれば是正したいので御教示下さい。）

川崎村の江戸時代

野村勝志

はからずも我が家から、古文書「川崎村田帳覚」（元禄八年一六九五年、四〇頁分）と「川崎名寄帳」（正徳三年一七二三年、一二頁分）と我が家の「田畑名寄帳」（宝暦六年一七五七年）（文政三年一八二〇年）（嘉永元年一八四八年）

反別、石高、戸数、人数など、解っている数字を古い順に書いて、御参考に供します。

（一六〇四年慶長九年検地帳）三百二十四石
（一六二四年元和十年）三百二十七石
（一八四八年）戸数八十軒 三百四人 うち男 百

七十四人 女 百三十人

●「川崎村田帳覚」(前掲)には

(うちもの) 田畑計 式拾三町三畝
十歩 村高三百二十八石八斗「小字」

「地名」付きの三百拾六筆

(一七三六年〓享保二十一年) 戸数
八十九軒 人数三百五十九人

「東作誌」(一八一五年〓文化十二年) 上州沼田藩土岐氏領、庄屋は茂
詰(もづめ) 六郎左衛門、田畑計〓

式拾二町五反 村高三百四十石五斗
六升八合、戸数八十軒、人数三百八
人(うち男百七十八人、女百三十人)

川崎村(今の江見)は吉野川の東
にあり、隣接村は北隣の吉田、藤生、

川北、原、上福原、山城、田原、日
指に囲まれる。山家川が東より貫流
する、北を川崎、南を江見といいま

す。古くは江見庄大川村でそれ以前
江見荘は後白河院領、皇室領粟田宮

領、吉田家領、室町幕府料所、東山

山荘領(銀閣寺領と変遷しています)

(国立歴史民俗博物館の荘園データ
書に記載)。

秀吉時代、江見庄は江見九郎次郎

に安堵されたということです。一三
三二年、後醍醐天皇の隠岐配流の時、

佐々木道譽の率いる五百騎が杉坂、

田原を経て大皿を越え川崎に入って
一休みして「大木の本」より藤生

「扇の元」に渡らせ給い、川北の天

王社に向かったそうです。「東作誌」
当時の渡し場一帯は「川崎河原」と

呼ばれ浅かったと言ひ伝えが残って
います。

一六〇四年、森忠政公が万の皿を
開いて土居宿を設け出雲往来を通さ
れました。

川北側からは「國司クニシの森」の側近
く川を渡って川端、地藏堂前を通っ

て山根を経て警固屋坂ケゴヤを登り地藏堂

を降って上福原(竜野藩預り所)前

に出ます。安政六年の大火後巾二間
長さ四十五間の土橋が架けられ(元

の大還橋の位置)瓦葺きに町並みが
整備されました。

橋元から村境までの道程は六丁二

間半、往來の途中倉敷(林野)―吉
野道と交差しています。倉敷道を別

れて左へ水が坂を登って福山へ更に
備前へと通行をしておりました。

山家川には大きな飛石があつて板
を架け「渡り上り」の地名がありま

す。藤生へは大木の本より筏にて川
崎からも入作していたと伝え聞きま

す。

江戸時代の川崎村の領主は、津山
森藩、改易後は天領、田中藩を経て、

最後は上州沼田土岐領となって明治
維新まで続きました。

享保・天明・天保に代表される大

飢饉、河川の氾濫、新田の開発の勞

苦と加えて、年貢の取り立て厳しく、
村人の困窮は図り知れずと聞きました

た。山家川が山根、川端へと流れて、
河原があつたのを真直に流す工事を

したという言い伝えがあり、合流し
た所「落合」江見側の土手には護岸

であろう大木の並木が私の子供の頃
ありました。山家川が流れていた所

であろう浪内、と言う地名がありま
す。山家川は早ばつに弱く(今は上

流にダムあり)涸れたる時、川の上
に樋を掛け鯉井せきの用水を江見田
圃へ送りました。地名「といかけ」



も生まれ、樋は報恩寺本堂床下に格

納していました。(昭和十八年頃が
最後でした)人物では、安政六年

(一八五三)江見の町の大火、その
復興に尽力した安東定雄(瓦屋根に

ふき替えるため「まるもん屋」など
瓦焼窯誘致)「沼田一揆」(一八六六

年、三日間荒れた)の鎮静に随縁寺
住職の由良日正らと活躍した報恩寺

住職朝道、学者、などでは安東定直、
茂詰英山、東嶺、松本和太郎等有

名、茂詰家へは日本外史などで有名
な頼山陽が訪れたと子供の頃祖母か

らよく聞かされました。

社寺では、普門寺、報恩寺、八幡

社、稲荷社、大歳社、江見大明神社、

荒神社が三社、地藏堂が二堂、愛宕
権現と行者さんの二祠があります。

村人達は祈り慰め広場で興じたこと
でしょう。江戸時代二四三年は長い

年月であり数多くの出来ごとがあつ
た事と思います。

江戸時代は「士農工商」の身分制、
五人組制と、農民への年貢の重し等、

今思うと自由の少なき時代、川崎村
に生きた先祖が耕した田畑を今も耕

す者として、過去の人達の事が、
「夜もすがら村のふるごと調べをれ

ば先祖へのおもひいよよ深まる」と
いう思いになりました。

去る六月二十五日、役場農村環境
改善センター宮農者室に町内の十七

名が集まって「歴史地名研修教室」
(事務局長新田祐之氏、近く作東文

化協会加入予定)を結成しました。

皆の力を合わせながら川崎村の現
地研修から始めようということにな
りました。

成果が上がっていくと信じていま
す。

老いのたわごと

吉 政 實 夫

私は七月三日満八十七歳で、計算すると三万一千七百五十五日。

考えてみると社会のごみとしてほこりとしてあまり遠くないうちに無常の風にはほこりのごとく消えゆくものである。

ある学者は人生とは花を咲かすところであると教えておりますが、私の小さな花は咲いたやら咲かなかつたやらの一生でした。残世の命を大切に大過なく終わりたいと念じつつ、反省と懺悔の毎日です。

このたび浅学非才も省みず、太く短く御国の為に生きた郷土の偉人を紹介したく筆を執りました。

作東町土居は歴史の町であるが人

口は江戸、明治、大正と年々減少し、ひなびた町に変わりつつあるが山も川も昔と変わらず白水国有林の雄滝を源流とする山家川は今も変わらず清流には地元有志の保護活動により錦鯉が群舞するような夢幻の世界に居る心地する平和な里である。

今年、正月からNHKで「新撰組」が放送されておりますが、あの有名な京都の寺田屋騒動の翌日、近藤勇に囚われながら武力と才知により切り抜けて近藤勇に泡をふかした、青年志士美作浪士安東鉄馬が居たことは我が郷土の誇りでありこれを伝えることは現世に生きるものの努めではなかるうか。偉人安東鉄馬は一八

四八年土居の宿場本陣安東家の次男として生まれ、幼名を貞啓誠之助と呼んでおり、父・桂二郎、母・れい子、兄・正虎。幼くして父を失い、

兄と母に育てられ少年時代より文武に励み、江見の原、安東直範に学び長じて、田島豊岡、池田章庵、播州・河野鉄兜に学び、兄正虎の協力により江州の国学者で勤皇家の、豊田謙二を招いて行余堂を起し地元青年を集めて勉学の間を作り武道は元より、勉学に励んだ。中国のアヘン戦争、黒船来航、幕府の井伊大老の不平条約等を学び、青年鉄馬は勤皇・倒幕・攘夷と諸外国の侮りを受けないう日本国の将来に大きな夢を持って上京。最初、生野銀山本拠とする天誅組に加わったが後長州藩に身を置き、坂本龍馬、桂小五郎等、長州志士と談論するなど明日の日本を夢見

ていたが、一八六五年蛤御門の戦いが始まり、一方の旗頭として参戦、味方の不利を承知の上最後まで戦い、戦死（二十二歳）

明治になる五年前、ある学者は彼が明治時代まで生きのびていれば日本国を動かす大政治家になっていたであろうと褒めたたえていた。

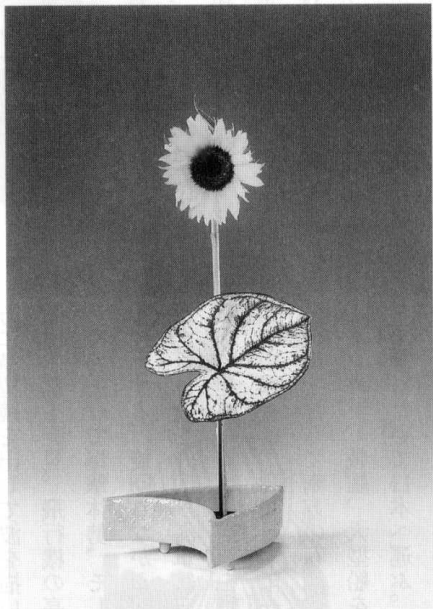
記録によれば鉄馬は劍聖・宮本武蔵を心の師とし、刀剣は普通の刀より三寸ほど長くまた小石を袋に入れて持ち歩き一〇〇m以内のウサギやキジを倒す技術を持っており、鉄砲術の扱いにも慣れており、また九州薩摩の自源流居合の達人であったような面も想像します。明治元年新政府ができて京都霊山に明治維新の功労者を祭るべく太政官布告の中に県内でただ一人名簿の上位にのっており、彼の功績を新政府も高く認めて

いたようである。また資料は作東町の歴史昭和四十二年九月発行のものによると現在、土居小学校の片隅に安東鉄馬の碑がある。

戦時中、大政翼賛会の壮年部が結成されその記念に建設されたものである。また明治三十一年七月四日宮

内庁より正五位の特使を持って伝記を送られた。辞世に、
我がたちのおれん限りを命にてなぎはてましを醜しのしこぐさ

母の歌
草枕いずこの浦にやどらん待つふく風の訪れもかな



生花 小林範子

第二次世界大戦争に戦って (遺稿)

長家博志

昭和十八年九月より昭和二十年八月十五日の終戦まで、足掛け三年海軍航空隊水上機偵察パイロットとして戦い、九死に一生を得て敗戦の将しくしくと故郷に帰る。共に戦って戦死した戦友にすまないとも何も語らず。呆然とその日その日をすごす。戦争は恐ろしいものであり、死とも生きることも、考えないただ自分との心の闘いであった。五十年前を思い出す。

昭和十九年暮れに台湾沖の海戦に初めて出陣する。未明素敵の命令が出る。三人乗りの水上偵察機で、台湾の一番南の東港九〇一海軍航空基地より、フィリッピン沖まで。丁度

作東町から東京位の距離をただ一機で。何もない、ただあるのは海と雲である。雲を利用して、雲の上を飛んで偵察するのであるが、朝は良いが、だんだん日中になると雲は上層して四一五〇メートルとなると呼吸が困難となってくるし、敵潜水艦は、集団戦艦はおらないかと、敵飛行機は一秒たりとも油断はできない。全身全霊をそそぐ。早く発見したのが勝ちである。天候の良い時は居眠りがつくぐらいであるが、視界の悪い時は気流が乱れているので飛行機は一〇〇—二〇〇メートルと上下にゆれる。自分の安全を図らなければならず敵どころではない。敵は既に電

波探知機を使っているし、はるか前方に潜望鏡を出して波を描いている敵潜水艦を発見。飛行機の高度をぐんぐん上げて爆撃体勢、そして爆弾を投下する。旋回しながら、爆撃の状況と位置を九〇一海軍航空基地に無線で連絡し無事に初陣を飾る。

次の作戦は、昭和二十年一月に〇号作戦と称して南方の石油、ゴム等をタンカー、戦艦、大型船を総動員して陸づたいで日本へ運ぶ。その船団の護衛にベトナムのカムラ湾九〇一航空基地へ。派遣命令で三機編隊で台湾から香港、海南島を経由して無事着任する。その当時はフィリッピンも既に占拠されており、敵はそこを基地に飛行機で日本の船団を攻撃してくる。潜水艦も一時間おきに出て魚雷を六本一度に発射してくる。その為我が基地から護衛に水上偵察

機の上空に戦闘機と二機編隊を組んで戦う。我が船団にいち早く周囲の状況を知らせる目的で日夜を飛行した。チラッとそれらしき潜水艦が出た、と思った時には魚雷が発射された瞬間であった。直ぐ船団に知らせた敵に爆弾を投下する。魚雷は船団と同じ方向に走って居るのではないかと思いきや、やがて魚雷は九十度方向を旋回して六本に拡大して船団に向かう。その一本が石油タンカーに命中して火を噴いて傾いていく。その時、遙か向こうに敵の飛行機、十機編隊が低空で飛んで来るではないか、船団に知らせ船団は一斉砲撃暗幕を張る、敵大型船一隻が炎上している。一瞬にして二隻の被害で元の静けさに戻る。我が飛行機のフロントに被害を受けたが航空基地に無事に帰還する。

昭和二十年五月上旬、飛行機も段々と無くなった時点で、南方や各地の生き残りパイロットをよせ集めて、博多の今宿に九〇一航空基地水上機隊を再編成して朝鮮海峡の偵察を開始する。第一分隊士として索敵を対馬を中心によく飛行したものである。

昭和二十年七月愈々本土決戦に備えるため、六三四航空唐津基地で攻撃水上偵察機として魚雷を抱いて、超低空で敵艦に突っ込む特別訓練を受けた。八月中旬、最前線である桜島航空基地で特別攻撃待機の命令を受け、沖縄作戦に待機する。飛行命令が何時来るか。

敗戦、九死に一生を得て故郷へ帰る。戦死した弟、戦友の冥福を祈り平和な世界を祈願する。

昭和六十三年秋記



短文 文芸

生きている
あかしとしての
自分の思いを
自分の言葉で
表現する
その表現が
万人の魂を
ゆり動かす
短文芸の力
伝統文化の力

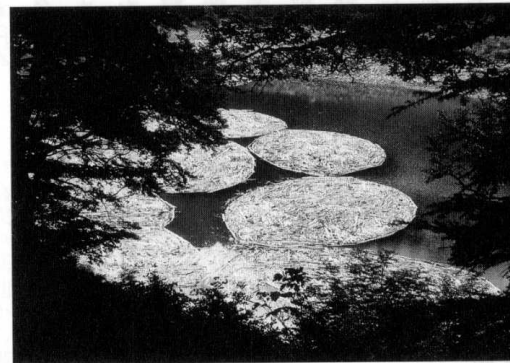
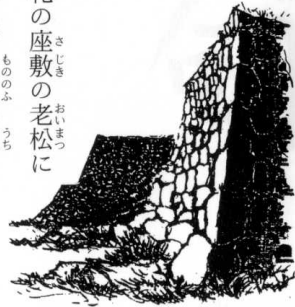


写真 山本真人

詩

年経りし花の座敷の老松に
問えども応えず 武人の裡



朝来群山清き雪
天下の覇者に愧ずるなく
命を断ちて残す名と
虎臥す態の竹田城
但馬の夢を誇りて止まず

さくら惜しみて打つ鼓
夢まぼろしの一差か
虎臥す城に舞う影は
その名残せし但馬武士

但馬竹田城

生野越えくる青葉風
古城の山に雲立ちて
四方を睨める不死鳥と
双翼ひろげし竹田城
但馬の夢に羽撃き止まず

田中清一

床尾おろしか降る紅葉
夜久野に敵を破りにし
勇者の挙ぐる勝鬨と
城郭高き竹田城
但馬の夢は轟き止まず

和田山ゆかしき山桜
円山川に影落とし
幾多の戦も幻と
霞を抱く竹田城
但馬の夢か語りて止まず
永久に但馬の輝き止まず

山の家

坂部金治

此所は岡山万善で

小高き丘に山の家

草木に光る朝の露

お山の向こうにお日様が

こぼれる笑顔覗かせて

園児の皆さんお早ようと

今日は黒見のキャンプ場

涼しき風が木の間抜け

優しく頬を撫でて行き

木立の陰で賑わえば

向こうのお山で木霊が騒ぐ

耳を澄ませば鶯の

澄んだ歌声流れ来て

夕焼け小焼けで暮れて行く

仰ぐ夜空に星の数

空いっぱいにぴかぴかと

おとぎの世界すぐ其処に

父さん母さんお休みと

遠く離れた山の家

何の夢見る寝顔の口元綻びて

俳句

菊日和

春名波留夫

春田打つ鋏に伝はる土の声

下萌えや寝転びをれば空の紺

二の鳥居元禄とあり新樹光

久々の妻の和服や菊日和

水仙の丘を登れば日本海

雛流し

春名静山

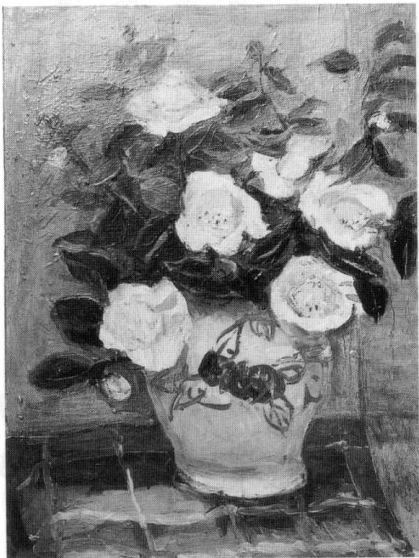
流れ行く一艘五百の雛人形

遥かなる池より届く田植水

理髪店出でて項うなじにある余寒

ワイパーの作動限界大雷雨

球団のマークに植えし古代稲



洋画 青山 巖

やせ蛙

黒藪 貴

先を行く猫も小さく青き踏む
にはとりの地獄となりし弥生かな
やせ蛙読経して居る一茶の忌
終の掃く程もなき鬼門かな
投稿の没繰り返す羽抜鶏

福達磨

青山元江

七転び八起きを願ひ福達磨
歳の神まつる家風も身に染みて
新茶摘み亡姉と競いし遠き日よ
大夕立鎌投げ捨てて一目散
亡父かとも目を疑いし夏帽子

四ツ塚

江見英雄

同志たち心尽くして草を刈る
今年はもひどい寒にて花筒も割れ
供華のためあまたの草を植えにけり
愛宕山天にも届けと太鼓打つ
新しき鳥居も建ちぬ神の域

大銀杏

安東和子

通夜の家の櫓にあがる寒の月
かたくななるは人のみならず梅の花
芽吹き近し幹ひきしまる大銀杏
父の日の作業衣泥のひかるかな
薯の芽の土押し上げてひかりをり

合歓の花

山本 緑

夕されば突きさす様な余寒風
飛行機雲啓蟄の空を真二つに
万緑に農終へ真紅の大入日
軒下の談話に飛び込む蟬の声
山峡の何処も競ふ合歓の花

写経

真野 雅子

トンネルを抜けて一羽の冬の蝶
入学児肩に重たくランドセル
仏壇の夫と分け合う新茶の香
写経する静けき寺の青蛙
ストレスも旅で捨てましょ夏帽子

姫女苑

高橋 やえ子

姫女苑みな刈られけり駅の土堤
日暮には白さきわ立ち姫女苑
野薊や摘んでは捨ててもどり道
知る人の絶えし故郷枇杷残る
お隣りの亭主自慢の茨の実

賑ひて

宿野 淑子

初夏やひらりふはり生命の舞
牡丹寺胡蝶の舞に誘はれて
五月晴れ涼を届ける紅睡蓮
入梅や心和ますあぢさる花
教へ子のトラちゃん田んぼ賑ひて

沙羅

坂井 はつ子

師の句碑に沙羅の落ちつぐ応聖寺
通帳の底が見えたり小判草
風足の見ゆる青葉の雑木山
熱帯魚みてきし幼はや描く
自生する河童が淵の紫蘭かな

山笑ふ

井口 祥子

サッカーのゴール一瞬山笑ふ
片言の孫とままごと山笑ふ
青嵐テントもござも巻き上げる
五月雨にあたり一面青となり
舞扇めざすことあり若葉風

折おりに

杉本 幸子(土居)

うぐいすの初音は音痴かケツケッキョ
草団子うまいと八個も食べた亡夫
植え終えし田の面に夕日の赫々と
夏座敷イグサの匂い新畳
星の里風さわやかに晩夏かな

孫新郎

加藤 美雪

部屋中広げては書く年賀状
個性ある注連縄みるも松の内
畠に出て鍬を取ればや冬の雲
春立ちて孫新郎と呼ばはるる
手袋は幾つありても置き忘れ

夜明の風鈴

森本 久子

こぼれ日にさそはれ咲きし百日草
いなづまに白く浮びし合歓の花
朝露の青葉の風やはらかに
眠れねば夜明の風鈴冷やかに
よい日蔭大樹と呼べど風見えず

春から夏へ

原 洋一

子が先に先に見つける露の臺
この人と生きるほかなし薯植える
芽摘みする農夫無口や桃の花
梅雨深し留守番の子と万華鏡
歌碑句碑の多き参道草を引く

ノースヴェイレッジにて

原田 順子

炎天下キラリと光る花時計
百円の餌に群がる鯉の波
孫二人芝生の山を転げ降り
元気君の牛舎に集う夏燕
幼抱きロングスライド夏の山

夏模様

遠藤 綾女

雲の峰腕白小僧手に負えず
腕白の果ては大汗大泣きす
雷鳴に一とき怯えるごんたかな
明け易し東を拝む母日課
母長寿犬も長寿や百日草

花山茱萸

長家克子

連翹の囲む生け垣友来る
初孫の婚のしらせや花山茱萸
空青く小梅もぐ手の共白髪
一発の梅雨雷におびえけり
夫葬り一人佇む星月夜

余韻

山本登山

一片の雲なき下に芋莖干す
撞く鐘の余韻の中に去年今年
馬酔木咲く山悉く匂ひけり
青蛙庭木の中に咽ゆらす
風鈴の音色気ままに部屋に満ち

春の月

坂部金治

静けさや水面に揺らぐ春の月
夕映えを浴びて輝く吊柿
闇の中呼び合子等の亥子つき
水溜り轍が碎く初氷
峡の寺朱色の塔や猫柳

母永遠の旅

山下照夫

生き延びてようやく聞こゆ百八つ
餅食えど母を思わば喉越さず
曾孫の出産待ちて指を折り
これ以上やせる術なき雪の朝
有難うと二言遣し永遠の旅

川柳

作州路

春名静山

凡人で地下足袋が好き土が好き
武蔵が行くお通が行く作州路
牛の爪切った人生振り返る
リストラが人生変えたホームレス
光らない電池の切れた老い蜚

秋模様

山本千恵

案山子にも着せてやりたい三ッ揃
だんじりをUターン組がかつい
秋なすを嫁にくわせる過疎の村
いわし雲秋刀魚の煙とどくかな
嫁には新米送り古米食べ



日本画 珍珠純子

ボケ鳥

江見英雄

風便り

小林亨

ボケカラス熟れてもない西瓜割る筋だけは通して欲しい人が居る教育は命はぐくむ事に尽き五人とも男の児なりけり曾孫たちブレーキを掛くる者なし気をつけにや

青い目と蒙古嵐の国技館純ちゃんのズボンふまなきやい神崎乳房の零れて盛夏子と午睡初恋の人は痴呆と風便り三界に名なし金なし敵もなし



旋毛曲り

黒薙貴

付き添いのひと時

原田順子

苦手ではない努力不足と叱られる手古摺れり旋毛曲りの嫁なりし積んだ金残り少なき余生かな悲喜劇にもまれし皺の数多しのさばるを任せ叩けぬもどかしさ

必需品リュックに背負い幼来る今はまだ「バアチャンスキ」と言う幼鰻やく隠すすべなし病廊に足投げて編む手も躍る夏帽子吾も又陶醉したし冬ソナに

黄昏

青山元江

無口

遠藤綾女

一日の労をねぎらい湿布薬三猿を守り行き度し老の坂信頼をし合える友を宝とし急ぐまいゆっくり余生かたつむり黄昏の夫婦でテレビだけ喋り

無口なのにカラオケとても上手です初対面無口で猫をかぶってたお見合も無口のせいか駄目になり無口同志波風立たぬ夫婦ですおしゃべりも九十歳超え無口なる

老

山本章

古疵を舐め合っている老いた猫
道草を喰うた分だけ幅がある
楽しくて同期二人のすごし酒
楽しみが他にない妻の長電話
おいぼれと言うなでっかい夢がある

夢

香山夕咲

あの夢の続きが見たい夜は明ける
相槌を打てば調子の弾む人
あれもこれもと愛で膨れる宅急便
女房のホテルの仕草惚れ直す
父ちゃんがまた釣り落したとでかい魚



時は流れて

山下光子

亡き愛児忘れられ得ぬ吾が運命
流れ来た吾が川笑い泣きが浮き
吾が人生流れを変えた貴方なの
流れ行く先知らぬまゝ身をまかせ
ひとり旅日々の流れが走り去る

老い

山本章子

老い二人虫の音色に話がとぎれ
愚かだと思いつ愚痴る老いの暮れ
ドクターの冷たい言葉老化です
惚けるなど歌って踊る指体操
若いふりしても腰はついて来ず

汗

太田智子

平凡に晴天雨天越えて来た
悩み事一つ終れば又ひとつ
選鉾場の夏草茂り人逝きて
散る紅葉言いたい事もあるだろに
この大地先祖の汗もわが汗も

想い出

遠藤 榮

春野行く野佛さんに手を合せ
早苗田に亡母が揺れる夏帽子
青梅もピンクに染まり旅に出る
柚子風呂で一つの願い温める
七夕や笹に初恋揺れている

双子山

原 幸子

流れる

名部 みどり

満天の宇宙旅行は夢でない
 何處だった昼寝の夢の行く先は
 幼児は母の乳房に触れて寝る
 寄り添うて何を語るや双子山
 桜より石垣めでる城の跡

おおらかに雲と並んで流れゆく
 ハンカチとバッグが椅子にデンと居り
 銅火鉢 灰皿に抱き村相談
 瞳でみつめそつとうなずくい返事
 弾んだあと話こわれたとは知らず



返事

名部 和子

林 齢

山本 登山

ハイハイと返事の相手はレンジさん
 タイマーのブザーに返事して止める
 返事してくれないかしら探し物
 返事せず戸を閉める手に反抗期
 台所の今度のピーは何の音

仇討ちのつもりで猪肉焼いて食い
 喜びに湧くバージンロード永久に
 箸持ったと隣の部屋へ告げに来る
 林齢百年見上げ先祖の影慕う
 野の昼餉空に鳶が舞うて番

青

西 冷夏

天然物

衣笠 隼 巳

成り過ぎて四苦八苦の青い梅
 青梅もストレス溜めて青い顔
 青梅も熟れば叩かれ塩漬けに
 夜桜に抱かれて眠る天守閣
 場所取りに大忙しの花見客

無農薬天然物と言えば売れ
 悩みごと溜れば悪夢で目を覚まし
 だんだんと隅へ追われる愛煙家
 勿体無い若い世代は死語となり
 虐待と仕付けのわからぬ親もあり

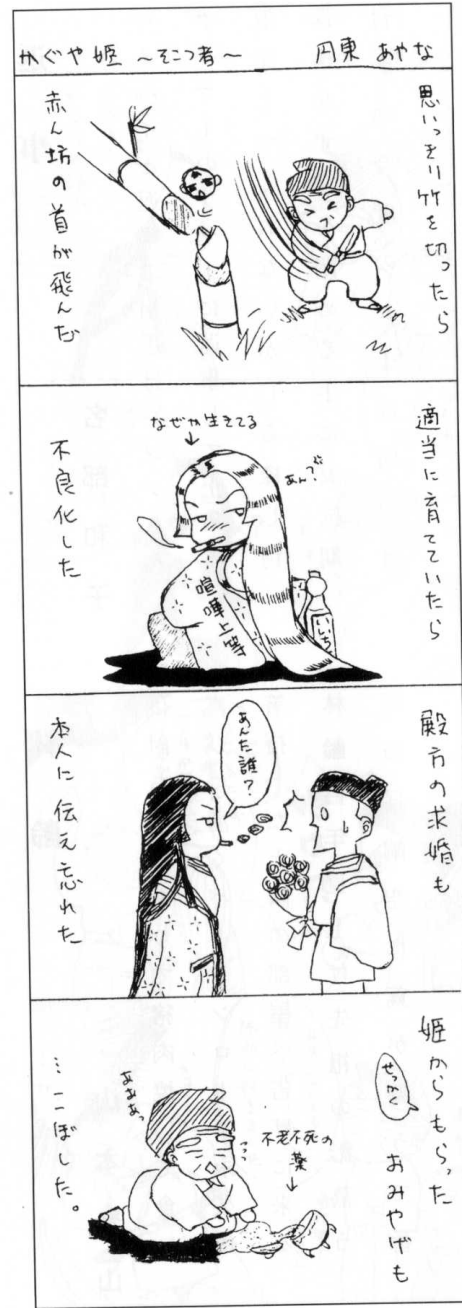
時事回顧

山下照夫

支援米受けてその後は知らぬ顔
一億円貰って忘れ健忘症
参議選敗けてもへ理屈大威張り
次々とメダルラッシュで眠られず
おらが村インター出来て市となりて



書道 山本加代子



短歌



生花 大倉淑子

君ひらくなく

三木泰葉

液晶のなかに込めたるわが活字君ひらくなく
クリスマス過ぐ

冬の日もすでに光は春ならむ薬草液は底より
泡だつ

鱗のごとくこの身に添ひ来ては堅くやさしく
光るいちにん

ふかふかの蒲団のなかに思ひみる灯心蜻蛉の
暗き草むら

かへらざるもののかたちか蛇の衣白く透きつ
つ長さを保つ

過去から現在へ

原 洋一

病癒え厨房に立つ妻の背を少し細りしと思ひ
見ている

青空に浮んだ白い昼の月朧なる君の記憶のご
とく

もう過去は振り返らないそう決めてあなたの
手紙を焼いていました

スルスルと梯子を上りまた下るあの鳶職は我
と同年

畑仕事は昼までと決めて午後からは読書時々
は午睡もありて

鳩の群

加藤 幸子

山陽道を一途に走る真向ひに十三夜らし白き
月影

雲ひとつ無き薄墨の大空に月はいつしか光増
しきぬ

足音に一度に飛び立つ鳩の群隊列くづさず身
を翻す

陽光の中を飛びゆく鳩の群身を返すたび羽裏
光る

見事なる鳩の隊列は訓練か習性なるやと見上
げてゐたり

誰をか恨まん

安室 舜海

何時しかに住む人の数少くて誰をか恨まん村
細りゆく

古き巢に繕ひもせず入り来しは去年の燕か帰
りきたるか

林道は町道となりしが何時しかに廢道の如く
なりにけるかな

相闘ぎ互に眨め己が国を守らんとするかつぶ
さんとするか

吊り鉢の折鶴蘭のランナーには隣の鉢に走る
ものもあり

明石海峡

江見 英雄

大橋に近き舞子の宮居にてたゞたゞ祈る国の
安きを

馬に乗り分隊指揮す砲兵の昔なつかし日本原
なり

妻逝きぬ喪明を待ちて祖霊たち鎮まる宮に合
せ祀らむ

日々に亡妻の好みし供膳をば考へあぐむ吾の
つとめとして

せめてもの慰めとせむ喪主として陳べし挨拶
よかりしと聴き

山の畑

春名 静山

そのかみの祖の拓きたる山の畑芒が原となり
て風吹く

吾が村の花形作物葉煙草を作りおりしが一軒
となる

テレビかと耳をすませば青葉木菟朧月夜の背
山に啼ける

玄関に挿せる白百合茶の間へと香り流れ来一
人の昼餉

農薬の効果少なき漏水田にて炎天を背に田草
取りおり

日本の力士

黒 藪 貴

八百万トン食べ残しして捨てる国三億人の飢
餓の世なるに

あしびきの山列島を陰陽に分けて恵みの水を
賜へり

協会の思ふ様には勝つては呉れぬ外つ国力士
の華やぐばかり

東久邇宮殿下の御視察に作業演じし若き日も
あり

B 29 編隊で来る空の下土佐の浜辺にたこつば
堀りし

恵みの池

末宗 千歳

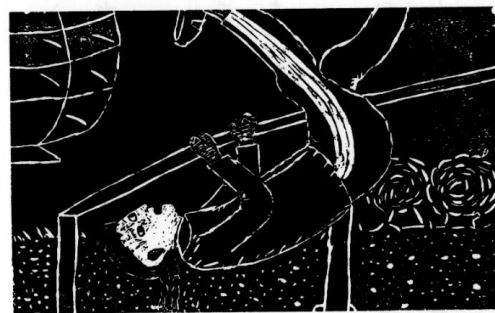
山峽に自然に生れしか造りしか神の恵みの池
大きかり

黒ずみし湖水の面はなぎてをり枯葉浮べ妖し
く寂かに

百数十年田畑育む用水に生かされてをり吾等
農民

青黒き水を満満溜めをりて広き古池龍神の住
むといふ

池の水ひたすら落ちて広がりて田の面うるほ
し夏深みゆく



江見小学校 山本奈央

手に重き銃

小林 亨

年金の論争老いに及びたり長寿も侘しこの国
に棲むは

イラクにて撃つな殺すな身を守れ派遣兵士の
手に重き銃

二百本挿して知人に配りたり今は火の色紅か
なめ垣

行者道山櫻散るきびしさを身にあびいかん垢
離取場まで

祖国在りておのずからある国旗国歌心しみじ
み称えなむいざ

癒されてゐる

横山 昌子

今日ひと日生き来しものの営みを包みて静か
に峽は暮れゆく

雑草なき世ならば老いて何せむと思へば草引
くも楽しからずや

物言はずひと日畑の草を引く本当のわれの心
のままに

連休も日曜日もなし毎日を思ひに任せ体にま
かせて

煩惱の多きわれらがもの言はぬ植物たちに癒
されてゐる

春

井上 さかゑ

地下足袋につきくる春泥かがやきて我のくら
しの活気づくなり

土の香をあなたこなたに届けたく財布はたき
て野菜の種買ふ

切り口のみづみづしかる種芋を植ゑこむ土の
手に温くき

檜の枝に足置くひと日地に立てば足裏にはか
に血の巡りくる

よもぎ菜を枯草分けわけつみをれば梅の花び
ら風にのりくる

折にふれ

杉本 幸子(土居)

またひとりかけがえのなき友逝きて寒月冷た
く吾が胸を刺す

かじか鳴く川の畔の湯の宿の露天湯舟に病葉
ひと葉

齢重ね互に耳の遠くなりはずむ会話も時にず
れおり

鉢植の赤く熟れたるミニトマト水やりながら
口に含みて

遅れいし友を待つのか電線に並びしつばくろ
しばし動かず

芙蓉の花

原 幸子

春一番が裏戸口に置きし野菜籠飛ばしてころ
がし走り去りたり

粟井庄の萌黄色なす山山の日ごとに変るか濃
くはた淡く

瀬戸の海に夕日が沈む美しさ茜にもえて映れ
るかげも

登り来し雲の上なる雲辺寺あぢさる一輪残り
て鎮もる

今朝も見る芙蓉の花の優しさよ若く逝きにし
友思はせて

戦時

横山 すみ子

新婚の大阪暮し半年にして空襲あびて皆無と
なりき

うすき大根三切浮びし雑炊を友とすすりし戦
時の外食

征く夫を笑顔に送りし江見の駅夕べかくれて
涙ぬぐひき

戦災の証明もちてもらひにき毛布一枚軍のお
下がり

空襲に壊れしビルに宿りして夜半に聞きにし
幼の泣き声

農に生きて

藤川 亜也

山峡に嫁して眺めて半世紀向山の大樫我を見
守るか

寒あけのそぼ降る雨に芽ぶく木木今年の農事
をカレンダーに記す

米余る時代に黙もく足し苗すれば飢ゑて泣く
子の映像うかぶ

起き出でて今日の予定は豆植ゑと野良着着こ
めば味噌汁匂ふ

今の事忘れて遠き幼日の懐かしかりけり風の
音聞く



土居小学校 難波 司

かたつむり

浜田くに子

神棚に灯明ほのかにゆらめきて雪は降りつつ
春立ちにけり

何もかもまあるくなれと言ふやうに雪はひね
もす降り続くなり

本当はもどかしいのかも紫陽花をゆつくり動
けるかたつむりゐて

吹く風の通り道らし花いかだは小さき実を乗
せ揺るるを止めず

サイドミラーに並木のカーブを見てをりぬも
うすぐ青い車が来ると

京都の秋

加藤保子

朝霧が四方をつつみて異界より聞こえるご
とき遠寺の鐘

時代祭の路傍に並ぶ人の列京都の秋のまぶし
きばかり

ひと群れのゆりかもめ来てさざ波の光れる午
後の川面に浮かぶ

潮風の冷たく騒ぐ山陰の海に静かに夕陽入り
行く

薄墨の色にかすめる水平線に二つの船が動く
ともせず

マニキュアをせむ

加百由起子

マニキュアをせしことの無きわれの爪土に汚
れしを愛しみ拭きやる

凍死せしをみな子達に思ひ馳す雪の粟倉しん
しん冷えて

五歳児にわれが言はれて老い母にわれが言ふ
なり「今言ったでせう」

仏の座いちめん咲く峠路しらない黄泉の国
を想へり

水色の匂ひ袋はミントの香京都の旅にて母に
求めぬ

冬の噴水

日下智加枝

夕つ陽の気配うすれてゆくなかに臘梅の花と
りのこされて

誕生日節分立春野の道の遠くまで照る思ひ出
のやうに

ふいに水がかたち整へ立ちあがり赤にみどり
に冬の噴水

窓いつぱい朝のひかりが射しこんで思ひ出し
さう思ひ出せない

言へないと言はないのとは違ひます蟻はもく
もく虫運びゆき

白き花びら

名 部 方 子

小豆島めぐらんと買ひし白い靴今年も叶はず
下駄箱の隅

水溜りて田拵へ一人する夫か臥処に聞こゆる
トラクターの音

田植済み小溝に入れば流れ来る白き花びら諸
手に掬ふ

取り入れも祭も済みて静かなり霜置く荊田鴉
も見えず

旅終り迎へてくれし三日月に荷物おろして大
き息する

異国の青年

船 曳 彩

スペイン語のパブロ君と日本語しか話せぬ吾
となぜか通じて

「おはやう」と言ひしパブロ君この吾は「オ
ラー」と返す朝の挨拶

味噌汁がうまいとお代り箸使ひ異国の青年は
ゆるゆると飯

「はじめましてパブロです」おぼえたての日
本語うれし会ふ人ごとに

「すばらしい」と檜の香りの風呂に蓋せずに
出て来る異国の若人

我に問ふ

内 藤 慶 子

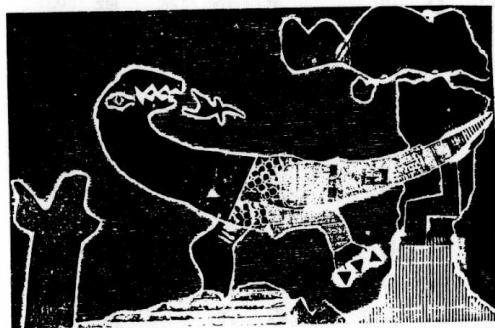
嫁ぎゆく思ひやいかに娘を思ふ気持ちやいか
に我われに問ふ

散り急ぐ花の姿を眺めつつわが身を想ふこれ
でよきかと

がんばれよプロの野球は夢の夢それをめざし
て張り切る孫よ

初速夜の母の遺影の笑顔見て我に似ると孫
が指さす

盆がへりの親兄弟の顔揃ひ緑の空気に元気は
つらつ



粟井小学校 絹田やすあき

心の綻び

北村 和子

積る雪に尚降り止まず積る雪何も忘れてしまへと言ふがに

百両に千両万両十両に一両もあり狭庭に色づく

冬眠のごと半年を籠りゐし我に眩しき白木蓮の花

「猪いのの奥山おくやまの空が曇れば雨が来る」我が家に伝はる天気予報ぞ

行き違ひし心の綻び繕はむと互に重き言葉を交す

孫に似る幼き園児

森本 久子

音もなき青葉の樹林啼きながら時鳥の声遠くなりゆく

青草に優雅に光る夜光虫露を求めてか姿消えたり

侘しさに夫の遺品を手に取れば天命の儂さ今更に思ふ

孫に似る幼き園児見る度に言葉をかはす老の嬉しき

谷奥の小川の流れに日の差して泳げる鯉が鮮やかに見ゆ

生き来しもろもろを

鈴木 秀子

青春の真唯中は戦時なりき世の移ろひを定めと思へど

半世紀を筆筒に眠れる軍帽を取り手欠けたる引出しに見つ

生うけて夢の如なるもろもろを夫は語るか五月雨の夜に

コンクリートの小さき割れ目に生ひ出でし雑草の強さがわれも欲しかり

吹雪けども微笑みて立つ野仏に花供へをり語りかけつつ

深き祈りに

横林 ふさ子

紫陽花の薄くれなるの花まりよしばし佇み話しかけ見る

バスに乗り半日近くで高野山につきたる道の遠くも有難し

小豆島旅の夕暮眺むれば山脈に沈む夕日の輝く

友からの初物の桃皮むきて食ぶれば甘き味しみわたる

亡き娘の慰霊の旅と香港の文武朝訪ひつ深き祈りに

亥の子

山下 三代子

ヨーサイの掛け声ひびく亥の子の夜大きく深
きあなあけくれし子等

絵筆もて暈せる如き紅葉なり晩秋の自然は偉
大なる画家か

冬枯れに山茶花赤く咲き競ひ蜜吸ふ蜂かあま
たむらがる

露の臺を水に浮かべて色紙描く春未だ浅き窓
辺に座りて

ふくいくと香りただよふ紅に薄くれなるに世
界梅公園

折に触れて

藤本 伸子

夫婦して共に死する事出来得ぬと知りてはを
れども離れ難しよ

通夜の席に遺影が笑ふ慈悲ぶかく堅き絆の長
老の死よ

老人ホームにてしづかに息を引き取りぬ見守
る人なき八十路の伯父は

犬剛が我には腹を見せぬのはどうやら部下と
思ひゐるらし

一年間活躍したる字「虎」ならん野球も終れ
ど「勝」をとめおく



吉野小学校 森上慎也

生きてゐる

小林 増代

生きてゐる二千四年も半ば過ぎ我はまだまだ
生かされてゐる

呆け防止と必至で続ける短歌にて呆けの進む
を思ひ知らさる

テレビにて大欠伸すれば何となく我もつられ
て大欠伸する

南天の白い花房風にゆれおいでおいでと外へ
誘ふ

挿木して根付きし椿の花咲きぬ八重の大輪微
笑むごとく

子らとともに

池田保子

をさな子とこまをまはして競ひ合ふ遠き昔の
我にかへりて

寒風をうけて球追ふ子どもらに我も負けじと
ゴールを目ざす

わらべうた子らと手を組みゲームするひとと
きの至福神に感謝す

あどけなき子どもら集ふ図書館の朗読ポラン
ティア我の生甲斐

図書館に集ひし子らとシャボン玉とばせば七
色晩夏のひととき

孫

新井和代

この痛み陣痛かとの娘の問ひにアクセル踏む
足力が入る

嬰兒の写真を中に額寄せわれに似てゐるとそ
れぞれにいふ

片手にてクッションを台に児を抱きメール送
りつつ母乳飲ませをり

お年玉アップしてよと孫はいふグローブ買ふ
と割り当てをして

動かないと年をとるよと賢しげに孫はいふな
りわれに向ひて

孫

名部和子

もう一回と指を振りつつわが孫は飽きずと同
じこと何度もせがむ

己が影のあるに気づきて幼児は追ひかけ追ひ
かけ駆けだしてゆく

からからと音たてまはる洗濯機止まれば孫の
ポケットの木の実

久びさに帰省せしわが孫自己主張の増えて驚
く世の流れかな

線香花火最後に赤い玉となりぼとりと落ちる
まで見てゐる児

さりげなく

新免三代

わが屋敷の井戸も見えぬやうに整地され賑は
ひ聞こゆる館となれり

憂きこともきなくさきことも無きやうに咲き
盛る藤よ萌え立つ木木よ

今更に言ひて何せむ老いの日を努めて自然に
芝居のくらし

さりげなくその背に触るる温りに涙する友わ
れもうるみて

新世紀平和であれと祈りしが憎み憎しみ狂へ
る命

折折に

鳥形節子

さはやかなる短歌の集ひ笑顔にて力一ぱい生
きるよろこび

わが庭の白と赤との花水木薫り来るなり笑顔
の心に

秋風に色とりどりのコスモスの花花花よ笑顔
の今日あり

わが庭の梅のつぼみもふくらみて香り立ちく
る一枝活けぬ

朝日照る山の緑の美しき聞こえる蟬暑きを
告ぐれど

老いて尚

新免初子

つらき事も嬉しき事も知りつくす焦げしこの
鍋捨てがたくをり

昭和平成と列車の如く走り来て尚も走らむ残
り火もやし

春川に流れ流れてゆらゆら淀へ船頭なしのス
チールの舟

人生の長距離レース走りつつ事無く終へたし
ランナー吾は

吾は未だ動ける行けると若やぐもいつはらぬ
鏡冷たく光る

栗の花

岡田利子

花魁のかんざしの如き栗の花ゆさゆさ揺らす
若葉風かな

重厚なる茅ふき屋根の円通寺和尚をしのび手
を合せをり

家ぬちを整へ野菜をつみくれて子は帰りたり
風邪を病む我に

恵方なる方位はわからねど差入れの巻ずしか
じる独りの節分

艶やかに変身したる我が孫の女形の写真みと
れてゐたり



土居小学校 朝霧 恵

農村の折々

宿野 和穂

こぶし散り行者の麓の棚田には田植ゑ近しと
畦ぬる農夫

育林の僅かの補助も税金の対象となるこの国
の財政

雪つもる山の靈気を抱きつつ松の木を積むワ
イヤーきしむ

鴨に見張り役あり柿の木の梢に留まりて鋭く
鳴ける

四時に起き五時より蒸しし赤飯を友の土産に
と折に詰めおく

今日も働く

荒尾 志ゑ

炎天下に働く夫を思ひやりそっとしのばすド
リンク一本

炎天下仕事に励むその背せなに土用半ばの風涼し
きや

夢多き短歌の会にさそはれて心もはづむ次の
会まで

色黒は母親ゆづりこの身体からだ両親おやを見習ひ今日
も働く

外国に旅立つ娘に思ふ事力のかぎりはばたき
勇めと

合併

福島 美智子

凍てつきし心を溶かす珈琲の温みよ春の扉も
叩く

暑き日の燃え立つごときサルビアの小花散り
そむ秋の片隅

合併に揺れるふるる里市になれば激ちのごと
く歴史が動くか

水無月の軒下繁く通ひあふ燕と雀の雛は巢立
ちゆく

忍び来る老いの足音聞こゆれど否定をしつつ
今を生きゆく

故郷の海

安西 苑

立葵わが背の丈にのびきたり花咲き散れば梅
雨も終りぬ

朝露が花より重いといふならん夏萩揺るる山
の細道

台風たいふうに狂ひし海は真白なる飛沫を上げて防波
堤を洗ふ

故郷の海を恋うて朝顔の海より青き花数へを
り

海見えぬ此の地に嫁ぎて五十年時に恋しく川
を見つむる

時は移りて

山下光子

衣食無く征く先知れぬ夫との別る、悲哀も無
き今の世か

亡き初^お男子^{のこ}の生れ出でし日の原爆日生命あり
なば六十路の前ぞ

年々に己が家同様我が庭の剪定なしくる義
弟のあるも

吾が傘寿祝いて妹等花回廊連れ行き広大美景
満喫

粹な芸^え海^び老^{ぞう}蔵^{ざう}襲名披露歌舞伎見とれ溜め息夢
路に酔いぬ

終

光井房子

裏鬼門に祖が植ゑにし終よ百年経りてやまろ
やかなる葉

炊き込みのご飯のにはほひ温かく夕餉をかこむ
三世代わが家

稍ふく風にも春の気配してひそやかに育つ冬
の木木の芽

霧ふかく杉の木立はとぎされて鳥の声のみひ
びきくるなり

代掻を終へて澄みたる田の面に映ゆる車の影
走りゆく



粟井小学校 春名恭子

小さき幸せ

角南 三津急

商ひて七十年を経しいのち猶し生きよと励ま
されをり

商は我が生き甲斐と思ひるるに子は案じてか
吾の歳を言ふ

暑い日は汗を流して働けよ緑陰の風なほ涼し
からむ

一人居が暮しに落着きもたらしぬ商ふことも
歌詠むことも

人生の様様なる苦境乗り越えし人のみ味はふ
小さき幸せ

峰の雲

名部 みどり

日の丸をふりつつ征くなど泣いた児は今その父を逝くなど抱きしむ

言ひ知れぬ思ひ出でリュックをふくらませ夫の柩に入れやる姉よ

ひなぐらの峰より昇る日に灼ける雲よ絶えずにいれかはり来てほし

何回も何回も大きくうなづいてはほゑみ見せて若き子の門出

藁屋根と大幟は足の下キャベツ畑より高い山なし

母

角 利津

痴れてより童の如き面差しになりぬし母よいつも笑まひて

冬日差す窓辺に父と寄り添ひてなに為すとき終の日の母

読み上ぐる百人一首に今は亡き母のおはこの歌の数かず

加茂川に頭ち来るものよ瀬に竿を振る父岸に濯ぎする母

かかはりも無き雲の如しも古里の空家に時の流れぬること

唐草模様

清田 三智子

今晚はと声をかくれば孫娘光る「携帯」持ちて帰り来

二月なるに四月の陽気一瞬をわが耳うたがふ驚の声

亡き夫の友と会ひたり思ひ出の中にし夫は若さを保つ

親の愛に飢ゑるしパンダ人間との愛にめざめぬ言葉あらねど

木漏れ日と草焼く煙重なりて唐草模様を描きては消ゆ

哀しき煩惱

江見 真智子

傷心を隠して登る法然坂強がり止せよと老骨の軋む

出直してまいちど遣り度きこと有りて越す気になれぬ七十の坂

鬼の住み蛇の住みあるか時にしてわれの心のあな恐ろしさよ

憎しみを断ちたるつもり法然坂下ればもとのわれに戻るも

雄日芝の如く生き来し夫なるに耐へ切れざりしか今日の暑さは

共に巡らむ

津田次恵

装ひて額に納めし野辺の花その愛らしく香り
さへして

箆笥の奥に母の遺せし頭陀袋八十八箇所共に
巡らむ

在りし日の母ゆづりなる早起きの厨に今朝は
柏餅作る

孫は歌嫁は手料理で誕生日祝ひてくれぬ夏真
盛り

朝夕を言葉交すがに見回りぬ夫が丹精の稲穂
出揃ひ

舅

坂井はつ子

熟柿いま啜らむとする舅の口やや受け気味に
尖りはじめる

舅の爪切るに弾みで片麻痺の足動く時ありて
声あぐ

舅は今われの肩をば抱くがに立ちあがり歩き
敷居を跨ぐ

わたくしと舅とのひと日暮れにけり盗み酒め
く酒沸かしをり

本人が九十歳と言ひ張るも白寿の祝ひにうか
ら集めむ

残されて

黒石貞子

あばら屋の一人暮しは淋しいと写真の夫に語
りかけをり

一人きりの長き一夜を耐へをれば牛乳箱をい
たちが鳴らす

この涙夫恋ふ涙かわが老後うれふる涙か頬つ
たひゆく

この朝を供へし酒の多ければ好める夫の写真
は笑むがに

今宵また差入れくれし娘の料理供へてのちに
ただきてをり



吉野小学校 小林達也

土に生く

黒石登代

雪折れの竹が白白枯れゆきて風が自在に吹き
分けてゆく

火渡りをためらひたるも語り草心定めて靴下
を脱ぐ

己が影と知らずくちばし打ちつくる小鳥が今
朝もガラス戸鳴らす

土の産む力知るゆゑ土に生く土は素直で裏切
りもなし

日本家屋は僕にはちよつと言ふ男孫鴨居で
頭を打つほど伸びて

下駄を鳴らして

入矢敏江

寝すごした朝のくせ毛が意外にも似合ふと思
ふ歯を磨きつつ

「悪意があればどこに居たって危険だね」ド
ラマを見つつ剥く毒りんご

間違つてゐてもお前の味方だと言ひし男の軒
がでかい

予期もせぬかなしみが湧くあたたかき赤子に
指をにぎられし時

夫の下駄履きてあまるをわが足にかたかた鳴
らし朝の水まく

光も見えず

横山美恵子

やれやれと雪かき終へて帰り来れば雪山連峰
が軒下に居座る

雪降りを案じて始めし畦直し機械納めてうぐ
ひすの声

雷雨去り小暗き部屋に座しをればかすかに聞
こゆる犬の遠吠え

猫は伸び畦のふきの葉も皆萎れ動かぬ我もじ
つとりと汗

足元の国揺れ町揺れ家も揺れ光も見えず年は
暮れ行く

怯ゆる日日

阿部すみゑ

東にも西にも突如鳥インフルエンザ鶏舎の消
毒は一日がかり

ふくみ啼く鳩の声にも怯えをり野鳥がウイル
ス運ぶと聞けば

二十余万の鶏埋められし京の里に桜咲け咲け
魂を鎮めて

是が非でも移動禁止は逃れたし湯上りでも思
ふは鶏の無事

鳥インフルエンザの終息聞きし夜のビール格
別旨し鶏飼ひわれは

わが峡

長澤 和枝

あはき陽に水紋ゆらゆら流れゆく流れて流れて峡の時去りてゆく

峡の空晴れに晴れたり絹雲の一刷毛ほどがうすれつつゆく

目のかぎり若葉の山山見わたせば久遠悠久現世の無情

かの日にも溢れてをりにし蟬の声原爆記念日黙禱の刻

家家の柿が鈴なり狸が猿が熊が食ったと村の話題に

夫の制服

徳野 富美子

缶ビール一つ握りて夜桜に夫を誘ふ定年間近の

朝出て夜帰り来るとあやふやなる事を信じて三十五年を

きき耳を立てて帰りを待つ夜は足音とまがふ落葉鳴る音

職引きし夫の脱ぎ置く制服にアイロン掛けする時間をかけて

百円で買へる大根を雪かき掘り取る夫の初収穫や

この冬

中川 富美枝

冬色に染まりてゆかむわが邑を鷺のつがひが低く飛びゆく

雪にけぶる外燈の下をもどり来る宴の余韻残りしままに

自衛隊派遣のニュース見てをればふつつ煮ゆる黒豆の音

寂しさは消すすべもなし中陰を過ぎて燈火消せばなほさら

ふみ出だす長靴の音きしみつつ深く沈みぬ真白き雪に



江見小学校 野竹こう生

嵯峨野

森本 かよ子

あこがれて歌枕の地を訪へば嵯峨野の楓色づき
きみたり

幾度か夢にし見たる小倉山なだらかにして優
しかりけり

小倉山の小道かき分け登り来て時雨亭の礎石
手にふれて見る

現し身を忍ぶることと生きませる式子内親王
齋院の跡

齋院の跡とぞ示す碑のきめ細やかなり柔肌
似て

大堰川の長き堰越す水音は未来へ響くか絶ゆ
ることなく

紫陽花

谷名 保美

梅雨の闇に紫陽花の花あざらけし過ち落ちこ
し糖星にあらずや

紫陽花の花紺青に匂ひたつ曇天の上の青空遠
かり

わが裡に波音たたしめ藍深し波状にうねる紫
陽花の花

紫陽花の花の影ふと濃くなりて陽の差しきた
る庭の差らひ

紫陽花の闇の向うより万象の眠り邪魔せぬ声
に鳴く梟

一樹の結界

関内 惇

峰の影つぎの峰へと映りつつ幾重の山脈明け
てゆくなり

音のなき谷深くきてこのままに消えてゆかむ
か息嘯の風に

樹も人もいづれ還らむこの山に神は仏はずで
に坐すや

山を恋ひ山に來りて人を恋ふ掌にさすりつつ
めぐる樹にさへ

サクラサクラさくらさくらと声にして仰ぐ桜
の一樹の結界



江見小学校 石黒寿梨

文化協会部活動 グループ紹介

グループ活動

それは

作東の文化の底力！



文化誌編集委員会

書を楽しむむグループ書道部

○阿部教室・阿部雲魚先生（岡山市在住） 会員五名
二回 雲魚先生宅で。

○白雲書道会 里見孤舟先生 会員二十八名 月一〜三
回 中央公民館外
町内二会場で。

○愛寿大学 里見
孤舟先生 受講生
十七名 月一回
環境改善センター
で指導を受けてお
ります。

又白雲書道会は
九月に白雲書道会
展をバレンタイン
プラザで開催して
おります。



絵画部油彩部会

○指導者 竹中信清先生

○人数 油彩教室十八名、水彩教室二十一名

○講座実施日 原則として油彩第一・第三土曜日、水彩
第四土曜日

今年から水彩画
教室も増設され新
会員が大幅にふえ、
活発に楽しくもり
あがっています。
年二回バレンタ
インプラザに作品
展示をして発表し
ています。若い人
が少ないのでご加
入を希望していま
す。



たしき会

○指導者 安東靖子先生(作東町川北)

○会員 十名

○実施日 月二回 第一・第三木曜日
AM九・〇〇〜一二・〇〇
平成五年五月に

発足。毎年作東町主催の文化展に出展。平成十三年三月 西栗倉 あわくらんど ギャラリーにて日本画色紙展示会を十四日間開催。
季節毎の名所めぐり、又華やかな花展、蘭の展示会等にも出向き、親睦をかさねながらの絵画教室です。



園芸部

○代表者 小坂田 文

○グループ人数 十六名

○展示会 きんちやい館広場 年四回 町文化展年一回
○例会 講習会 寄せ植え年二回 鉢作り年六回
「会場 きんちやい館」

県北に自生する山野草の研究や種子からの育苗、新聞紙を使った手作り鉢の研究、木の根や竹を利用した花台や器の研究、他町村との交流会等を実施する中で生きがいと会員相互の親睦を主題としています。



ひまわり

○指導者 長家清甫

○グループ員数 十五名

○例会・講座実施日 月二回 第一・第三土曜日

花とお喋りの好きな者が集り、なごやかな雰囲気の中で、稽古しています。生活様式も変化の中で、格式ばらず誰にでも直ぐできる生活の中での生け花を楽しんでいます。何よりも花を通して、和の心を大切にしたいと思っています。



茶道部

○指導者 長家宗春

○会員数 十二名

○例会 月二回 第二・第四金曜日(地区センター)
月三回 日曜日
(長家先生宅)

表千家茶道教室は、和敬静寂の中で互いに相手を思いやる心と、一期一会の精神で稽古を重ねております。
初釜、桜祭り、七夕祭り、お月見ふるさと祭りなど皆様とご一緒に一服のお茶を戴ける楽しさを求めています。



能登香短歌の会

○代表者名 岡田利子

○グループ員数 十九名

○例会 月一回 第二金曜日

旧栗井村のメンバーで、和氣藹藹と勉強しており、人数は増加の一途である。

発足は昭和二十年。作品二首を持ち寄り、相互に批評しあったり指導者の添削を受けている。また、現代歌人を一人ずつ取りあげて、その作品を鑑賞している。



英北短歌会

○代表者名 関内 惇

○グループ員数 二十一名

○例会 月一回 第二月曜日

各種短歌大会への参加、大阪・岡山方面の短歌会との交流など積極的に行っている。

発足は昭和五十七年。毎月、自分の好きな歌人の作品を取り上げて鑑賞すると共に、自作二首の相互批評や指導者の添削を受けている。



吉野短歌会

○代表者名 横山美恵子

○グループ員数 十二名

○例会 月一回 第二水曜日

佐用郡から三名加わっており、県境を越えた交流ができています。

本格的な発足は平成六年。毎月、現代歌人の作品を取りあげて鑑賞すると共に、自作二首の相互批評や指導者の添削を受けている。



作東町川柳同好会

○代表者名 山本章

○グループ員数 十三名

○例会 奇数月最終水曜日

平成十年に発足した本グループでは、毎月、課題句三句と自由句（雑詠）二句を提出し、

町出身の岡田千茶（岡山市在住）先生に添削を受けます。奇数月には例会を開催し、和氣藹藹、会員相互の親睦と研鑽に励んでいます。



古文書を読む会

○会長 小林良矣

平成七年から始まり、今年で九年目です。現在会員数十六人。月一回(第三金曜日)の会では会員が順番に資料の解説・解説を担当します。楽しい会です。新規入会大歓迎。



写真同好会 「写友」

○指導者 小玉 司 代表者 小坂田 貢

○会員数 十五名

○例会 撮影会年五回
文化協会発足以来、

阿部雲魚先生より写真部の任を仰せつかり以後、一九七八年写真活動の部員も増え、写真同好会「写友」として発足し、年四〜五回の撮影、例会等で活動し町内のみならず他の公募にも出品活動をし、実績をあげています。

昨今は信州まで足を運び一期一会の自然や写真を楽しんでいます。



陶芸部

○代表者名 圓東順一

○会員数 十名

○講座実施日 七月下旬〜八月(不定期)

夕涼みをかねての土ひねり、窯場は特に涼しい。気のあった何人か集って、おしゃべりしながら作品作り。作り始めて二時間たらず、先ず先ずの作品に仕上りほつと一息。星をながめながらの帰路、窯たきが楽しみ。



手芸教室

老人会の手芸教室が開かれたのは、昭和五十五年。老

人の生きがい対策として園芸・手芸・囲碁が母子センターで開講された。その手芸教室の最初からの参加者は江見

の山本こんめさん(九十歳)。今なお

お元気で教室に通っているスー

パーおばあさんです。現在は毎週月

曜日、江見地区センターで開かれて

います。参加の生徒の平均年齢は七

八・五歳!!。皆さんも一度教室にお

出かけ下さい。
妹尾さと子



早淵流剣詩舞

○指導者 早淵流宗範 安原鯉舟

○グループ人数 三十人

○例会 月二回

昭和五十年頃よ

り詩舞、剣舞の練習に励んでいます。

メンバーは幼児・

少年少女・青年壮

年老年等幅広く、

年一回初舞の会を

催したり、町の

「舞の会」に参加

したり、県大会・

中国地区大会のコ

ンクールにも挑戦

しています。



作東町囲碁クラブ

○部長 横山宏志

○会員数 六十四名

会としては、双山囲碁クラブの名の大会を年三回行っており、勝英二郡・

佐用郡・津山市か

らも参加者があり

ます。

例会としては毎

週土・日曜日にエ

ミーを会場に開催

しています。又、

小中学生を対象と

した囲碁教室を土

曜日中央公民館、

日曜日に粟井教育

集会所で行って

ます。



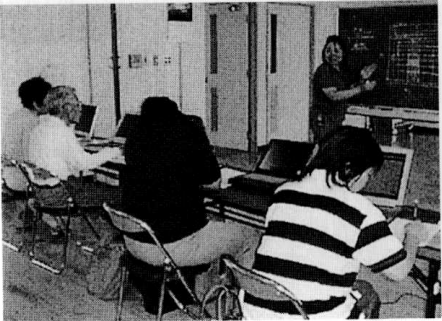
お達者ネット倶楽部

○代表者 鳥形初美

○グループ員数 八名

○活動日 第三木曜日

IT利用の活性化が叫ばれ始めた当時、情報映像部を創設した今は亡き前部長の主張は「パソコンとかインターネットと言うと『私はアナログ人だから』『若い者のすることだ』と敬遠する人も居ますが、もう好き嫌い、趣味の段階ではなく、これからの仕事、生活には不可欠のもの、特に中山間僻地の老人こそ生活必需品だと考えられます」というものでした。私たちは文化協会ホームページの管理運営を通じて、パソコンやインターネットを誰もが気軽に楽しく使えるものになりたいと思っています。



農協女性部絵手紙教室

○代表 岩本敏子

○会場 勝英農協作東主幹支店

毎月第二土曜日午後

「あなたも一緒に絵手紙を楽しみませんか。」

携帯電話やパソコンの

発達で一瞬の内に電波が

流れ通信が出来る世の中、

今さら手紙なんか面倒く

さいと言う人もあるかも

しませんが、上手、下

手の問題なく、四季折々

の草花や、生活用品等を

一寸書くだけで相手に

「心」温かいものを感じて

頂けるのではないでしょ

うか。



吉野ハピネス

○指導者 竹内まり子先生

(西粟倉村生まれ、現在垂水にお住まいです。)

○人数 七名

○日時 月一回 第三日曜日 午後七時

神戸より先生をお招きして、月一回のお稽古を楽しんでいます。

「私は、夢見る夢子ちゃんよ」と、おっしゃる先生の夢を奏でるような話術にはまり、忙しいと言いなながらもほんのり温かい作品が出来上がっているのです。

現在「きんちやい館と大久保百貨店」に展示しています。絵手紙と言うより、夢の便りか、心の便り、といった感じです。一度見にお出で下さい。そして一緒にしませんか。



彩の会

○指導者名 須田洋子

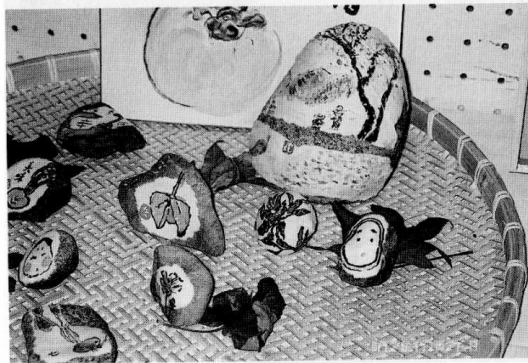
○グループ員数 八名

○講座実施日 月一度 第二土曜日

絵手紙にひかれた仲間が、集まってもう四年になります。最近では、月に一度、絵を描くだけでなく一か月間、胸に溜めた思いを話したり、聞いたり。

いい線が描けた時、いい色が出せた時の満足感は、描いている者にしかわからないと思います。

私達の作品は、町の文化展・郵便局等に展示して、皆様に見て頂いております。



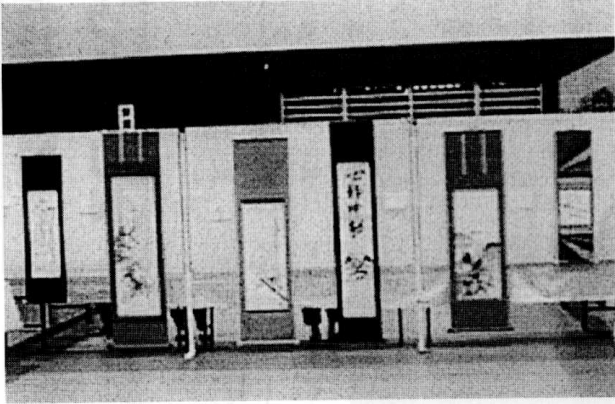
墨絵教室

○代表 岩本敏子

○会場 勝英農協土居支店

第二・第四火曜午後

墨の濃淡で色々な物の表現が出来る絵を楽しみませんか。時には少し色を添えて趣を変えてみたり、上手に描けなくても、世界に一つだけの自分の作品として楽しむことも出来ます。



押絵・ちぎり絵 むつみ会

○代表者 小林艶子

○人数 八名

○日時 第一・第三土曜日

年齢の差なく始めた押絵・ちぎり絵。指導者「山本津多江さん」の元で、和気藹藹楽しい時間を過ごして、早くも十年余り。今では、人数も少なくなりましたが、忙しい時間を割いて過ごした日々、そのおかげか今では元気そのもの。

今は小学校にも展示させて頂き、生徒と一緒に作品作りに楽しんでいます。



ふしぎな花俱樂部 押花サークルJUN

○指導者 山本淳子

○グループ員数 四十名 (JA江見、JA粟井 十三名)

○教室実施日 JA江見 第四火曜日 P.M.11:30~

JA粟井 第一月曜日 P.M.11:30~

私たちの「ふしぎな花俱樂部」は名の通り、不思議なほど草花が色あせずきれいな色のまま押花になります。

お子様からお年寄まで簡単に作れるのが魅力です。四季を通して草花に触れ、今まで以上に草花に興味を持つようになると思います。



土居小学校 小林麗弥

作東町文化協会会則

(名称)

第一条 本会は作東町文化協会と称する。

(目的)

第二条 本会は作東町民の文化生活の向上を期すると共に、会員相互の親睦を図ることを目的とする。

(事務所)

第三条 本会の事務所は作東町教育委員会事務局内におく。

(事業)

第四条 本会は第二条の目的を達成するために次の事業を行う。

- 一 講演会・研究会・展覧会等の開催。
- 二 文化誌などの発行。
- 三 その他文化の推進に関する事業。

(会員)

第五条 第二条の趣旨に賛同し本会の事業を推進する者を会員とする。

(組織)

第六条 本会に部及び支部をつくることができる。

(役員)

第七条 本会に次の役員をおく。

会長 一名、副会長 二名、理事、部長、
副部長、支部長、評議員 若干名、監事二名

(役員の仕事)

- 第八条 一 会長は会を代表し会務を総括する。
- 二 副会長は会長を補佐し会長に支障があった場合は会務を代行する。
- 三 理事は会務をつかさどる。
- 四 部長は部を総括し副部長は部長を補佐する。
- 五 支部長は会務をつかさどり支部の振興を図る。
- 六 評議員は運営について協議する。
- 七 監事は会計を監査する。

(役員を選出)

- 第九条 会長・副会長は理事会で選出し総会で承認を受ける。
- 二 監事は総会において選出する。
- 三 理事は部長・副部長・支部長をもってあてる。
- 四 部長・副部長は部で、支部長は支部において選任する。
- 五 評議員は部長・支部長が推薦し理事会にお

平成15年度 作東町文化協会事業報告

【全体事業】

年	月	日	事業名	内容
15	4	22	第1回理事会	15年度事業計画・会員募集について
	5	9	専門部役員会	専門部行事計画・予算配分について
	5	9	第1回編集委員会	編集委員長選任・編集方針について
	5	30	勝英2郡文化協会総会	英田町公民館/14年度事業決算、15年行事計画案について
	6	2	第2回理事会	研修旅行・原稿募集・文化展について
	8	8	第2回編集委員会	以降3回開催(8/19、9/16、9/24)
	9	25	文化展打ち合わせ会	部門別出展数及び配置について、2階体験教室について
	10	4	研修旅行	広島県竹原市
	10	15	文化誌29発刊	会員全体に配付
	10	24	役員会	文化を語る会について
	10	24	文化展準備	会場設営・作品搬入
	10	25	文化展	海洋センター～26日
	11	11	作東の文化を語る会	町長を囲んで文化を語る
16	1	16	第3回理事会	春の書画写真展について
	3	5	第4回理事会	総会について
	3	27	春の書画写真展	改善センター～28日
	3	28	文化講演会	バレンタインプラザ

【各専門部・支部活動】

年	月	日	部名	内容
15	4	6	茶華道部(茶道)	お花見茶会 バレンタインプラザ
	4	20	棋道部	第90回記念 双山囲碁大会
	4	27	芸能部	よしもと湯郷公演前座出演(昼の部)
	4	27	園芸部	春の山野草・つづら籠展 きんちがい館～28日
	5	1	絵画部(洋画)	春の作品展 バレンタインプラザ～5日
	5	5	園芸部	鉢作り つづら籠作り 講習会 きんちがい館
	5	23	土居支部	総会(評議員会)
	6	18	絵画部(日本画)	東北美術展出展 津山市～23日
	7	1	絵画部(洋画)	小品展 バレンタインプラザ～30日
	7	29	園芸部	つづら籠講習会 粟井研修センター
	8	3	茶華道部(茶華道)	サマーバレンタイン花展・茶席 バレンタインプラザ
	8	24	棋道部	双山囲碁大会
	9	5	書道部	白雲書道展 バレンタインプラザ～7日
	9	7	茶華道部(茶道)	お月見茶会 山の学校
	11	11	福山支部	役員会
	11	14	文芸部	川柳同好会研修旅行(久米南町川柳公園ほか)
	11	22	吉野支部	研修旅行
	12	15	福山支部	研修旅行(大阪方面)
16	2	8	園芸部	バレンタイン祭 つづら籠講習会
	3	7	粟井支部	第13回 粟井地区文化祭
通年事業			絵画部(洋画)	絵画教室 環境改善センター 第1・3土曜日午後1:00～5:00
			絵画部(日本画)	こぶし会/第2土曜日午後1:00～ さつき会/第2・4木曜日午前9:00～江地セ
			園芸部	交流会 籠・鉢作り・寄せ植え 不定期
			茶華道部	役場窓口・公民館への展示
			文芸部	川柳同好会 奇数月最終水曜日例会 午後2:00～4:00
			歴史部	古文書を読む会 毎月第3金曜日 午後1:30～
			写真部	役員会 撮影会 作品研究会 総会
			陶芸部	陶芸教室 圓光窯 7～8月
			手芸部	中央公民館 毎週月曜日、毎月第2・4水曜日午前9:00～12:00
			棋道部	囲碁教室 中央公民館 毎週土曜日 午前10:00～
				練習 ショッピングセンターエミー 毎週水・土・日 午後1:00～
				粟井小学校囲碁教室 随時
				粟井教育集会所 毎週月曜日 午後1:00～
				文化協会HP更新
				部会 第3木曜日 午後1:30～ パソコンサークル 毎週水曜日 午後7:00～ 粟井地セ
			役員会	
			役員会 年5～6回	
			書道・手芸・短歌・情報映像	
			愛寿大学趣味の講座	
			各専門部	
				プラザ両側面へ展示

いて承認を受ける。
六 任期中途の補充役員は理事会において選任することができる。

(事務局担当者)

第十条 事務担当者は会長が委嘱する。

(役員任期)
第十一条 役員任期は二年とする。但し再選を妨げない。

二 任期中途の補充役員の任期は前任者の残任期間とする。

(顧問・特別顧問及び参与)

第十二条 本会に顧問・特別顧問及び参与をおくことができる。顧問・特別顧問及び参与は総会の同意を得て会長が委嘱する。

(会議)

第十三条 総会は毎年一回開催する。但し必要に応じて会長は理事会の承認を得て臨時総会を開催することができる。

二 評議員会を以て総会に代えることができる。
三 理事会は年四回開催する。但し必要に応じて臨時理事会を開催することができる。

(経費)
第十四条 本会の経費は会費・賛助金・町よりの事業委

託料・その他をもってあてる。

(会計年度)

第十五条 本会の会計年度は毎年四月一日に始まり三月三十一日をもって終わる。

(会則の改正)

第十六条 この会則は、総会の議決により改正をすることが出来る。

(附則)

一 会員は年額一口千円の会費を納入するものとする。

二 部会は書道・絵画・園芸・茶華道・文芸・歴史・写真・陶芸・芸能・棋道・情報映像・手芸とする。

三 この会則は昭和六十三年四月一日より施行する。

四 平成十年三月二十九日会則一部改正 平成十年四月一日より施行する。

五 平成十一年三月二十一日会則一部改正 平成十一年四月一日より施行する。

六 平成十四年三月二十四日会則一部改正 平成十四年四月一日より施行する。

編集後記

三十周年記念号を編集するに当って、協会の沿革史を作ることとなり、その記録の掘り起し作業を進める中で、先輩達、特に創世期の先輩達が、いかに苦勞を積み重ねて、その基礎をきずいてこられたかを思い知らされました。会員千人を越える、自慢に値するこの組織も幾多の試練をのり越えながら、ゆっくりとしかし着実に成長して来たということなのです。

作東町の文化と名を付けて他町に誇れるものは、美術館と図書館そして我が文化協会だと思っています。中でも、文化誌の発刊は、文芸部門の発表の場として、又協会の機関誌として、内容の稚拙さはあるとしても、その底辺の広さと三十号という歴史の積み重ねは他に例を見ない文化活動だと自負しています。

願わくば、この灯を消すことなく、さらに発展ができますよう会員諸氏の力添えを期待するものです。

編集委員会

顧問	春名 宏 (町長) 松本正人 (教育長)
特別顧問	阿部正登 里見 明
参 与	安東靖雄 (文化財保護委員長) 岩野恒夫 (中学校長)
	三村純一 (町校長会会長) 大霜隆雄 (商工会長)
	河股利和 (青年協議会会長) 山本文子 (婦人協議会会長)
	新田 勉 (老連会長)

会 長	円東順一
副 会 長	横山 猛 真野みよ子
理 事	書 道 部 北村福作 真野みよ子
	絵 画 部 末宗一之 安東眞江
	園 芸 部 小坂田文
	茶 華 道 部 杉本幸子 谷本津多江
	文 芸 部 谷口重人 安東琢之 三木忠司 原 洋一
	歴 史 部 小林良矣 安東靖雄 春名正昭
	写 真 部 小玉 司 青山時弘
	陶 工 芸 部 円東順一
	芸 能 部 香山勇作 松本壽豊
	棋 道 部 横山廣志
	手 芸 部 妹尾さと子
	情報映像部 鳥形初美 光井和彦
	江見支部長 末宗秀夫
	豊野支部長 久保照夫
	土居支部長 春名貞和
	福山支部長 青山時弘
	栗井支部長 松本壽豊
吉野支部長 小坂田 貢	
監 事	上山克己 梅沢紀之
事 務 局	沖田明彦